明治三十一年九月廿五日

女學雜誌

第四百七十二號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百七十二號目次

◎社說
非改革の辨
重厚の人斷の如し
◎評論
支那改革
士族と町人
◎女學
美裝論
高等女學校の教育を論す　鷗村
都會の女子と田舍の女子と　かもめ
女風俗報告集
◎教育
體育論
曲學阿世論
◎隨感
賞景歎美のよろこび◎旅懸のまじはり◎芭蕉と西行◎大悲の感慨◎美育◎吾子を傳道者とするの祈禱◎先生と坊守◎花のしづく
◎雜錄
鳥聲草露　井華道人
（山川と民心◎棚の津磨◎紳の家◎心の花）
◎時文
小說界の落莫◎小說家の不作◎雜誌界の不振
◎片々◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す
◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾儕の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。
◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみと指定して所望せらるるものあらば其の需めに應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	壹冊定價	拾錢
	半年分定價	壹圓拾錢
	一年分定價	貳圓
	（內國無郵税）	
	代金は總て前金にて御注文ありたし（年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送することも可有之事）	
廣告料	一行（廿七字詰）一回	前金拾錢
	同　三回以上	一割引
	同　六回以上	二割引
送金	送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし　郵便切手にて送らるる人は總へて一割增にて計算せられたし	

明治三十一年九月廿四日印刷
明治三十一年九月廿五日發行
發行兼編輯人　嚴本善治
印刷人　布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
（電話本局十九番）

社告

櫻井成明君譯
腓立比物語　正價金二十八錢　郵税金六錢

橫山雅男君著
婚姻論　正價金十二錢　郵税金四錢

池袋清風著
淺瀨の波　第一篇二冊、正價二十八錢　第二篇同　郵税一篇各々六錢

◎前號（第四百七十一號）九月十日發行要目
◎親としての人 子としての人◎神人相思相愛◎隨感八則◎官邸磨すべし◎男子訓◎私生兒◎教育死活の辨◎史論片々◎朝の讃美 彼山此水◎等

故若松賤子英文集
嚴本嘉志子　正價金六十錢　郵税金六錢

嚴本善治著
我黨の女子教育　正價金十七錢　郵税金二錢

故鈴木弘恭君述
百人一首講義　正價金二十八錢　郵税金四錢

同
文法口授　正價金十二錢　郵税金二錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

弊社が昨三十年九月十日發兌第四百四十九號紙上を以て婦人社會學研究の爲二十項の問題を擧げて、各地女風俗の調査報告を大方諸君に望む處ありしが、其後幾多の報告に接せしも、婦人問題や事頗る宏大、此等は未だ万分一をだに盡くすものに非ず。由て更に再び兹に調査項目を列擧して、投寄の報告、これより益々多からん事を希望す。

女學雜誌記者識

各地女風俗調査項目

一 男女交際の有樣
(未婚の男女の交際に關する世間の制裁は嚴なるか寬なる乎。男尊女卑か否や等)

二 家庭に於ける女兒の狀態
(家風庭訓の及ぼす教育上の特色ありや。女兒の遊戲、玩具手習等に於て目立つものありや等)

三 主婦の義務、勢力、財產等に於ける特別の狀態

四 下女の風習、其雇入の方法規約、彼等が風儀、及び下女に對する家庭の態度

五 女子嗜好の傾向
(茶、花、琴、歌、又は義太夫、芝居、小說、常磐津、清元、三味、踊、骨牌弄花等、其他の遊戲)

六 婦女子勞働の狀態
(勞働の時間。一日の平均賃錢。幼女の勞働者ありや、一般婦女子の勞働増加せるや。工女の風儀、婦女の從事する職業の種類、婦女の勞働過度なるとなき乎。男子の勞働に比較して輕重如何。婦女が職業を選擇する自由の有無。婦女勞働者は生計を支へ得るの賃錢を得る乎等其他)

七 婦人慈善事業の有無、組織、景況、及び勢力

八 婦人會の有無、組織、景況、及び勢力
(女同士の談話交際遊戲、又ハ觀音講の類を含む)

九 婦女子の教育に關する一般世間の意向、女學校の狀況、學齡女兒就學の割合等

十 女學生の風紀、修學者の増減、其志望の傾向等
(女學生の主婦たる家庭、其歸郷後の實蹟等を含む)

十一 婚姻、離婚の方法、及び再婚に對する世間の思想
(早婚の弊なき乎、夫婦年齡の懸隔甚しき者なき乎　初婚大凡の年齡、婚姻の儀式簡畧とならざる乎等)

十二 女子の風俗
(年齡に準ずる頭髮の結び風、帶の結び方、化粧附飾は何程まで甚へし乎。茶屋女、私生兒、密賣者の増加、婦人の飲酒喫烟。ここに交通、教育、興業等によりて影響されし近年女風の變化等)

十三 殊に目立ちたる女の服裝、はき物、手拭道具等

十四 宗教上に於る婦女子の信仰、事業、勢力
(女子の特に歸依信仰する神佛の名稱、願かけ、願文、お寺參り、及び寺院僧侶等に於ける女子の風等を含む)

十五 尼、巫女、妾等となる婦人
(土地の婦女多き乎他所のもの多きか、貧窮の爲か風習の爲か、又は醜業者より轉ずるもの多きか等)

十六 女子の音樂に關する特別の氣付き

十七 女先生、女先覺、又は有力者にして、其地方の婦女子を感化するもの並に其姓名小傳

十八 婦女子に關する有名の古跡、古碑、並に其小史

十九 婦女子他國への出稼の有無、増減、行先(何地方に多く行くやの事)及歸宅後の狀態

二十 藝者及び娼妓の稱呼並に此等に對する世間の輕重
(醜業に對する勸誘の盛ひならざる乎、醜業者に對する特別の規の有無を含む)

◎寄答者への注意

一 紙上に記載を要せらるゝ仁は別に本名及び住所を添られたし

一 寄答の原稿を女學雜誌女學欄に掲載したる時は、寄答者に該號の雜誌三部を進呈す

一 報告寄送は凡て左の名宛たるべし

東京麹町區下六番町六番地

櫻井鷗村

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

東京裁縫女學校長 渡邊辰五郎先生著

裁縫教授書

全部三冊 定價金一圓 郵稅金八錢

渡邊先生の裁縫に於けるや技術に長じ、理論に精しく、殊に其教授法の巧妙なるに至りては、餘人の企て及ぶ能はざる處なり。此書は即ち其特長の教授法によりて、諸般の裁縫技術を親切叮嚀に說明せられたるものなれば主婦は素より女學生も亦裁縫を學ぶに當りて、必ずや坐右此書を備ふるの要あるなり。

大取次 東京巣鴨村庚申塚 女學雜誌社

故若松賤子英文集

巖本嘉志子

一冊正價金六十錢 郵稅金六錢

小公子の譯者故若松賤子の英文述作に於けるや筆路頗る流麗なるを以て稱せらる。今此書は即ち女史が英文廿一篇を收めたるものにして、加ふるに女史の友師ブース氏及其他内外知友記する處の女史の小傳追悼記等を以てし、また女史の肖像を掲く。蓋し以て内外家庭の閑暇の友となすべく、又以て尋常中學高等女學校等の英語教科書となすに良好なりとす。

發賣所 東京巣鴨村庚申塚 女學雜誌社

大取次 東京京橋區釆女町 警醒社

故若松賤子女史譯述

小公子

全一冊洋裝美本 紙數三百五十頁 正價金三十五錢 郵稅八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるること數十回、一代の流行を左右して一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化し、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憫み、小作者を愛撫し、言行總て甘露慈雨の如し、讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるるを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや、少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史曩に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を棄る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるゝと切なり。即ち玆に其遺稿を收め、女子が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、鄕友松井昇氏は密畫を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

大賣捌 東京巣鴨村庚申塚 女學雜誌社

女學雜誌

第四百七拾二號

明治三十一年九月廿五日發兌

社説

非改革の辨

◎今の工合では、人心は倦んで仕舞ふ、速かに一大改革を遂げて、人氣を一新せねば爲らぬ』とは、憲政黨の有志者が、數ば慷慨して主張する所だと聞くことであるが、眞とに是れ歎かわしい見識である。

◎一體、改革なるものは、已むを得ざるより發することで、元來は、事物の變である。寧ろ之を不吉と言はねばならぬ。無論、好んで行ふべきことではない。然るに、根本の着眼よりして、至誠已みがたき發動より決行するでもなく、ホンノ、目先を新たにして、人氣を引ふと云ふ輕薄なる心より、改革を試みようと言ふ。言ふものも、怪しからんことであるが、之を聞いて奇しむものゝ少ないのも亦た驚ろくべきことである。吾人は必らずしも德義上から斗り左樣に言ふのではない。斯る改革を行つて何かの効能のあるように思ふことの如何にも愚なる故に、若言ふのである。又、斯る精神から出た改革で、人氣が刷新するものと思ふのが、あまり人間を愚にした話しで、子供でも左樣な造り事に久しく欺かるゝものではない。天下の事は、多勢の人を合手にして、至極の大綱に適ふたる事を行なふが主意なれば、些細の權謀などは、長く効のあるもので無い。其道理が分らぬは、不德と云ふよりも、寧しろ不明と言つて宜しいことである。人氣を引くと云ふ心持で事を行へば、たとひ其心を隱くして居ても、自から其氣味が人に分つて來るものである。況してや、初めから其策で改革を爲せよと公言し乍ら、人氣が之によつて刷新するものと思ふは、如何にも馬鹿らしい話しである。辛うじて、一二の改革を爲し得たる比ほひには、人々は既に其の主意を覺つて、ハハア、人氣取りの政略を見よと言つて、拍手して笑ふことであらう。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

其結果が善くとも、惡くとも、毫も人心の倦むを防ぐべき効能はないのである。

元來、斯樣なる分り切つたる事にすら誤解があつて、堂々たる數多の名士等迄が、此の弊に陥いると言ふは、何等の譯である乎。吾人が思ふに、兎角改革と云ふものに對しての觀念が幼稚であるからだと思ふ。

今では、改革と云ふ二字が非常の流行である。改革をすると云へば、何かエライ事のやうに思ふ癖がある。改革は、英雄の爲る事で、凡俗の爲しかねた所だと思ふて居る。改革さへすれば、總て何でも善くなると謂ふやうに考へるのが、今の流行である。あまり馬鹿々々しい見識と言はねば成らぬ。

先ず、小さい時から段々に成人した現在の我が體を見るが善い。何時、改革と云ふ事を爲て丈夫に爲つた乎。なるほど、改革を爲て善くなつたともあらふ。然し之は不養生や、ふしだらの後で、大きう當を極め、之に氣がついて斷然改ためたから、少しは丈夫になつたと謂ふ丈けの事で、元と此の樣な事が初めから少しも無つた方が寧ろ善いのである。世の所謂には、生まつて丈夫な人には、昔しから今日迄で、一度も其體を改革したとはない。殆んど、其の身の行狀を變へたと云ふ事はない。丸で其邊のとは全たくの無經驗で、それで而も至極の健康であるのである。改革呼はりを爲る體ほど、初めは亂暴に取扱かつたのである。左れば、一度も改革などと人爲しく言はぬやうになるのが、第一の理想でなければ成らぬ。

昔し、敵打の講談に聞き惚れて、どうか己も親の敵を打つて見たいと言ふた相なが、夫では親が人手に掛つた後の頓發を自から求めるのである。改革を善いとのやうに思ふものは、丁度此の類である。

但し、既に前人の失策で、弊害續出し、到底、一改革を爲ねば成らぬと云ふやうに爲つて居るとしても、改革呼はりを爲て、人の目につくやうに改革を爲るとは、改革の中の尤とも下等なのである。下等とは、品の惡るいと云ふ丈でなく、尤とも下手だと謂ふのである。改革らしい改革をすれば、遠からず、ヨリがもどるものである。夫は、名手が無理で、功を急ぐ氣味があるからである。改革の上乘は、無名の改革で、人の氣に付かぬやうにする、所謂る大功名なしと云ふ所ろの改革が一番に宜しいのである。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎今の内閣當路の諸君子も、嘗には民間にあつて大言壯語した人々である。平生の辯論は、只だ改革々々と言つて元氣よく主張するとであつた。然るに、實地に臨んで、實事の經綸に當つて見れば、中々局外から見たやうなものでなく、一々尤ともな事が分り、迚も改革などと言つて手を下す程の事の無い所以が分つて來る。すると、又、第二の改革論者が出て來て、昔しの我と同樣の事を主張して迫つて來る。アー書生流義では成らぬと云ふ其人も元は書生流義であつたが、現在實事に當つて少とし沈着になると、後進の目には既に老朽と見へる。丸で、イタチニツコである。昔しの勤王論者が幕府を倒してからは、自分が藩閥と云ふ第二の幕府を造つた。ソレト同じ筆法で、民權論者が此の藩閥を倒したが、此の民權論者は亦た政黨と云ふ第二の藩閥を造らんとする。之から更に又之を倒さんとするものが段々出來かゝつて居るのであるが、不思議にも彼等が皆な一齊に叫ぶ所の事は、いつでも「改革」と云ふとである。而して其の改革なるものゝ行はれた例しは曾てない。もと行はれべき筈のものでないからで、其の辯論で主張した此の改革案は大抵空想である。此の空想が實地に當はまらぬとは、何れもが遠からず發明するとであるが、其發明する比には既に後進によつて同じやうにいちめられて居る。因果應報の天則で、止むを得ざるとは言ひ乍ら、今の改革論者が亦た又他日同樣の苦しみに會ふとも知んで、只たシヤベツテ居られる工合は憫笑至極の事と思はれる。親仁は兎角時勢後れで、當世の事が少とも分らんと言つて不平を言ふ若者が、追々、年をとると、其の親仁と同じやうなとを言ひ出して來る。其の比になると早や息子が出來て、此の息子が昔しの我と同じやうなとを言つて親仁を馬鹿にしてかゝる。左れば、老人の言ふた事を尤もだと悟る頃になると、早や若いものには馬鹿にされて居るのである。今の内閣諸公も、伊藤侯等の苦心を思ひ當られるであらうが、夫丈け又た後進にけなされて居るのである。

◎ナゼ、人々は改革と云ふとが好なのであらうかと考へて見るに、改革は第一、花々しいものである、兎に角功が見えるものである。改革は、人の爲た事が氣に入らんで、自分の思ふやうに仕て見たいと云ふ所から起る者である。昔の人が功を立てた跡を見ると皆な一つの改革であるから、改革には名

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

界が伴なつて居る。改革と云へば、何か元氣の善いやうで、伎倆があるようで、進步の精神を爽かにするやうである。兎角、改革と云ふヿの人に好かるゝは尤ともなヿであるが、扨て、改革なるものゝ本質を考へて見ると固より目出度いヿでないから、ソヾ〳〵好むべきヿでなきは勿論、既に改革と云つて人の目につくやうな改革ならば、眞の事業、眞の人生から見ては、既に第二等の事であると思はねば成らぬ。之を最上の事のやうに理想するなどとは、品格の甚はだ卑くいヿである。

○若し、世の中に眞價なる改革事業ありとすれば、自から我心を改革すると云ふが即はち夫れであらう。翻然昨非を悔い、丸るで他人の樣に變ると云ふヿは、只だ微妙絶對の人心に於てのみ行はれるヿであるから、則はち此の處にこそ有力にして有益なる改革事業が行はれるのである　其他には、左程目立つた改革事業なるものはあるまいと思はれる　左れば、今に當つての改革なるものは果して何事ぞと云ふに、必らずしも官吏の大更迭にあらず、必らずしも、文官任用令の全廢などにあらず。今の政治家なるものが、人氣取りの爲めに改革をしやうなどと云ふ其心を第一に改革して、眞質眞面目の着眼を心に引起すように改たむるのが何よりである。若し着眼こゝに到らば、今の囂々たる改革論などは自づから止んで仕舞ふ譯で、人々、事物の根底に注意し、人の目に付かぬ所に救濟の方を講じ、禍を未然に防ぎ、事を機先に制して、改革さわぎをせぬ所に、大改革の實を奏すると云ふやうになるであらう。是れ、無改革の改革とも云ふべき者で、則ち眞の改革である。

○凡そ、國家の樞機々密と云ふものは、多數決で決したり、多數人で行ふなどのものでない。西洋憲政國の現狀を見ても能く分かる、況んや我國などでは尚更の事である。然るに、いつ迄〳〵、國家の事が改革呼はりなどで治まつて行くものと思ふ人の多いのは、政治思想の幼稚な故である。此の幼稚な政治思想は固より何時の世にもあることであるが、今少し眼の醒つた政治家もありさうなものと思はれる。吾人は寧しろアキ〳〵して居るのである。

◎苦を抜き、樂を與へ、平和を來し、治安を維持するが、政治上の慈悲と云ふものである。政治家たる國士は即はち此を天職として其福音の擴張に盡力するものであらう。因つて、治國平天下と云ふ事を日夜の念願として努力することであるが、扨て、如何なるが治平で、どれより越ゆれば亂であるかの見分けをするのは、其人の品格次第である。臆病者は、些の事にも驚ろいて、世が引繰り反るかと思ふが、沈着の人は決して左樣でない。國家天下に對する見分けも亦た此類の事がある。

◎陳渉呉廣も先觸には相違ない。それ所か、一葉の落つるすら既に前兆である。然し乍ら、天下の變動が此等些細の事によつて起るのではない、實は既に起つたる大動變の機端が此等の所にちら〳〵と見えて來たと云ふ丈けの事である。苟しくも、國家と云ふほどの復雜なる機關を組織したものは、大によらず、小によらず、左樣な詰らぬ事で容易に動くものではない。

◎然るに、言論や、演説や、改革呼はりや、政黨員の増減位で、世の治安が破れやうなどと思ふのは、全たく杞憂である。此等の事は、何時の世にも絶えるものでないが、又それらの爲で世が大騷動になる氣遣ひもない。決して、左樣な事に屈托する價ひはない。但だ根本の所が薄弱となつて來ると、此等些細の事より機端が開らけるから用心をすると云ふもの、本來、變動の根底となるものは、決して此等の些事ではないのである。

◎夫故、空想論者や、演説使や、名利を追ふ流行つ子や、滔〳〵たる遊民の徒が囂々たりとも、決して之に驚く程の事はない。之によつて社會の治安が根底に於て破れると云ふことは決して無い。但だ、實義、實力ありて、眞面目に家業天職を盡しつゝある良民等の心を失ひ、彼等が重厚謹愼なる心に絶望せしむるに至れば、時の政府は決して續かぬ、其末は到底一混亂を免かれぬ事である。斯樣な良民は、容易に動かさるる事もなき代りに、動いたらば又容易に承知せぬ。元來、浮かれて流行に狂奔する族でないから、一時の事で怒つたり、喜こんだりして、最後の心を動かすと云ふことはない。此

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の所の其民の心を得ると得ざるとで、世の一治一亂がわかるので、夫が一番に氣遣はしいのである。所謂ゆる名士などの贊否向背は、大した變化を起すものではない、ホンノ乘取策位に了るのである。

（三）夫れで、斯る良家良民に、固より新聞屋的の批評眼を以つて當今の名士を鑑識せんとするにはあられざるも、元來、私心邪氣なくして當代の公人を一見しつゝある內に、自づと其の人格に感通するもので、不思議にも正當の見識をつけるようになる。大言壯語をする政治家は、大言壯語の黨に好かれ、剛氣謀略の政治家は、剛氣謀略の旗に好かれ、所謂ゆる類を以て集まる人心自然の成行といふものが、不思議にも深く結托するやうになる。然かるに忠誠謹愼にして、溫雅重厚の心掛を樂しみ、邦家公私に私なき言動を爲しつゝある良民に在ては、迚も面白からる名士に對して悅服するとか出來ぬ、而して、十年二十年と見つゝある內に自づと當代一流の人とも眞面目なる名士を見つけ出し、又、其の仲間合にて語り傳へ、自づと謹厚忠誠なる種類の國士を識拔するやうになる。其人の勳功は赫々たらず、其人の名は普通に知られず、其の評判は所謂ゆる交際社會には流行せずとも、血は血に交はり、誠は誠に通じて、自づと同類相感ずるやうになる。之は眞に不思議なるものである。

（四）夫故、國士にして、眞に治國平天下に志あらんものは、良民の中の忠良雅重なるものゝ心に納得せらるゝことを主旨として、其の政治を誠にし、其の經綸を實地にし、其の責任を重厚にして、此等の良民の由て安んずるに至るやうに努力せねばならぬ。誠意正心を以て政治を取ることを第一の心得とするといふリクの實效的理由はコヽに在るのである。然るに、一時の權道によつて、一時の人心を收攬するなどは、元來、無益の心配で、此の類の人心は收攬せずとも左程憂ふるに足らぬ、よし放つて置ても、大事にはならぬ種類の游民である。何よりも第一に心にとめねば爲らぬは、國家の骨髓なる良民のことで、之にさへ氣合すれば、他の諸々は自然と治まりもする、治まらずとも憂ふるに足らぬこととなるのである。

（五）天下の高きに居り、天下の廣きに坐し、天下の事を以て心とする人士は、たとひ其名を隱し、其功を沒し、其伎倆を包むとも、實際の品行は數十年にして自づから貫徹するもので

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其の貫徹してゆく丈けが、治國平天下の基となるのである。夫より外に奇策明法とてあるものでない。一時の權謀で一時をつくらふが、此の一時は何百年立つても何時迄も一時である、少しも精誠の足とはならぬ。天下に志あるものは、左様の淺薄なる經綸では相濟まぬとである。古人の句に、重厚の人斯の如しと言つて、平の重盛を仰いだ。重盛一人あるうちは、根底深き源氏すら旗をあげるとが出來なかつた。治國平天下とは即はち此處にあるのである。

◎今の國士を以て任ずる人が、只だ法制の編案、局課の改正などに屈托し、所謂ゆる隱然重きを爲すの素養に力めぬと云ふは惜しむべきとである。然し乍ら、斯様なる國士によつて今の治安丈けでさへが、兎に角、維持せらるるものではない。故人今人の中、隱然良民の心を維ぐ英傑があつて、其感化力の惰性なり、もしくは現在の感化力なりが次第に傳はる柄である。後の國士たらんものは、其邊に心をひそめて、自から修め、自から任ずるの訓戒とするが宜しいとである。

評論

支那改革

◎伊藤侯が支那に到着した所が、之を大臣に薦めたいと言ふたものがある相な。侯も途方に暮れたと云ふ電報であるが、夫はウソであらう。必らずや、内心感服して歸らるるに相違ない。もし伊藤侯が歸朝後にも矢張り支那を見ると昔の如くであらば、吾人は甚はだ遺憾に思ふのである。

◎支那の事は、迚も日本流義の筆法で考へてはならぬ。丸るで調子が違つて居る。一と度び聞けば阿呆らしく、一と度び見れば馬鹿らしいのが、日本人より支那を見聞した時の直覺であるが、之は國風國躰の違ふゆゑで、致し方のないとである。然し、何處迄も日本流義をもつて之をあしらはうとすると、今度は、日本が本當の馬鹿阿呆となるのである。

◎近頃段々支那の事を言ひ出して來た。支那に洋行する人も多くなつた。支那問題は今の大問題となつた。而して、之が改革策とか經營策とか云ふものを色々に立論する人も見る。

伊藤侯なども其の即一人で、ナニカ李少荃に忠告するとか言ふ大相の抱負であらしつた相ナ。然し吾人の考へから言ふて見ると、大抵管な支那の爲めには無用の心配で、申さば餘計のお世話と云ふやうなものかと思はれる。一體、日本は小さい國で、其の政治は上から一々世話を焼く流義であり、又其の流義で行はふとする利益もあるゆゑ、箇樣に鐵道だの、電信だの、蒸氣船だの、會社だのと言ふものが迅速に起つたのであるが、抑も利益の勘定から計算して見れば、此の樣な諸機關が自治の民力で斯早く發達し得るものであらうか、甚だ疑はれるのである。日本人の商賈には、國益と云ふとを念頭に置くが、支那人の商賈には、毫ど其の觀念がない。其の觀念の無いのを一概に惡しく言ふ人があるが、吾人は必らずしもさうは思はぬ。それは先づ何れにしても、第一、國益と云ふ觀念から事業を發起するとが無いから、利益の割に合はぬ事業は決して起らないのである。日本に現在ある色々の文明的機關でも、利益の上から見れば極、損の少くないもので、迚も純然たる商賈にはならぬのであるが、タヾお上風の權勢や、お上の世話などで成立つたのであるから、之を現在の支那に向つて注文し、かゝる事業を發起せしめて、其の開導を計らふなどとは、到底望む可らざることである。

◎中には、支那に銀行を立てさせやうと言ふ人もあるが、夫もあまり支那を小さく見た話しである。第一、日本でも、銀行と個人の信用と、何れが多いかと言へば、迚も箇人には及ばない。夫で箇人一家の信用で、銀行の出來ぬ程の融通機關となつて居るものも隨分あるのである。支那人などは即はち夫で、たとひ銀行と云ふやうなものは建てて居らんでも、實際、日本流の銀行よりも優つたる銀行事業を爲て居るものが大層多くあるのである。信用組織にせよ、爲替の法にせよ、盛大に行はれて居る。日本の銀行は、銀行と云ふ名を掲げても、實は質屋だ。支那の個人は、銀行の名はなくとも、實際は銀行である。夫にも拘らず、ワザ〳〵銀行を建てさせやうなどと勸告するも、アチらでは腹の中で、笑つて居るであらふと感ぜられる。

◎一體、支那人を保守だと云ふのが譯の分らない話である。彼等は町人風の言葉で言へば、實に譯の分つた人物である。筋道が立ち、損益の勘定に乘ることであれば、如何なる舊習も構はず破つて仕舞ふのである。其處に至れば、無神經同

様で、其とに冷淡なまど、横蹈である。其の意味から言ふて、保守とは言へぬ。反つて日本の人は、譯の分つたことでも我意を言ひ張り、妙な所に拘泥して、我慢で進歩せぬとが多くある。寧ろ保守と云ふて宜しいのである。

◎夫で、支那に國會を開けたの、軍備を大いに擴張するよなどと言ふて忠告するのは、日本が先蹤のつもりかは知ぬが、實は後れた話しで、我國未だ三十年來の夢が覺めぬのかと、向ふの識者に笑はれはすまいかと恐れる。成程、支那にも、慷慨家があつて、所謂ゆる西洋流、憲法風、文明風などと云ふものを無暗に慕ふものもあらうが、夫は申さば、支那での出過もので、本當の支那流義ではない。迚も長く廣き感化力を持つて、四百餘洲を一統して治める人格ではない。矢張り支那では、李鴻章が當今第一の人物と言ねば成らぬ。

◎李鴻章でさへ、西洋心醉家と言つて嫌はれて居る。然しあの人が西洋に心醉するのは、器械工藝の事斗りだと云ふことだが、近頃では、露士亞と結ばんとする其の經綸から嫌はれて、日本びいきの一派に斥けられたらしい。日本たるものが、之を善い氣に思ふて居ると、遠からず知らざる間に、支那は大躰露士亞偏となつて、彼と締め秘密になり、李鴻章の説が再たび行はれるに相違ない。其時は日本は又もや機後に後れると云ふものである。願はくは、日本をして李鴻章の考に同情を有たしめ、支那が露士亞に近づくを賛成したいものである。何れ、二十世紀の大立物は、支那と露士亞とであつて、而して、彼等は相反するものでなく互ひに仲を好くするものに相違ないのである。

◎世界に大勢力あるものは、腕力と、金と、道義の名とである。露士亞の腕と、支那の金とが合しては、中々の大勢力であらふ。日本は何卒、道義の名に於て之を助けたひものである。何し、外交上に於て、何の國と同盟するとか、せんとか云ふとを平生から定めて置くとは、一寸善くないと吾人は思ふて居る、何所の國にも同盟するが善いのである。何れにも親疎なく公明正大に交はるのが善いのである。夫故、露士亞を疎外するは善くないと言ふので、此の露士亞に親しまんとする支那の政治家が斥けられ、支那が今暫時日本に傾むかんとする氣色を頼みにして、露士亞と支那との交はりを疎くせしむるなどは善くないと言ふのである。日本が仲に立つて

支那と露西亞とをいよ／＼親しましめ、李鴻章をして其の露西亞に向はんとする經綸を實行せしむるやうに助力したいものだと思ふて居る。

〇伊藤サンは、是迄で隨分支那を馬鹿にして居られた方であつたが、今度、御歸りになれば、少しは、支那に對するお考が變るであらうかと思はれる。伊藤サンは極の西洋流儀で、而も西洋の憲法流儀であるから、支那の流儀とは少し種の違い方であるが、何しろ博學明敏のお方だから、多分豁然として悟らるゝよかあらうと信ぜられる。之が伊藤侯の大變化で、侯の將來の政治に妙な制法修文的の僻がなくなるのも此邊から兆せば、國家の幸である。凡べて、支那の爲に改革案を立てる人は、終りには、自分が改革されるので、隨分、妙に變つて仕舞ふ。果して然らば、支那の爲に色々と餘計の心配をする今の流行は、日本の一つの國益と言ふて宜しいよである。（九月廿一日稿）

士族と町人

〇人爲的教育の結果を見るには、士族が宜しい。地文や社會の感化を見るには、町人が宜しい。試みに、一地方に行きて士族と町人との氣風を御覽なさい。士族は、藩の制度、藩内の學風、藩の貧富格式等によつて養成せられたる、人爲的教育の結果によつて、夫々一種の氣風を造つて居る。其町人は同じ所に居り作ら、丸るで違ふ。彼等は、此の人爲的教育を受けたのではない。全く其土地の形勢、貿易交通の如何、物產貧富の關係などからして、氣風を造るので、全たく士族の受ける感化とは違ふ。士族には人爲的が多く、町人には社會的が多い。其の結果を見るほど、教育の効驗を明らかに示すものは少ない。

〇士族の氣風は、斯く養成せられたものだから、昔しの藩々で、皆な別々ではあるが、然し亦た精神が封建政治であるから、一體が封建の士氣風を持つて居る。此の氣風は皆な同一で、即はち、大體、士族根性といふものを養成したのである。

◎士族の根性は餘程薄らぎはしたが、まだ中々亡びない。元來、人の氣質は三代立ぬと變らぬものであるが、維新前の士から未だ二代で、特に當代のお士が未だ丈夫であるから、士根性は中々消えては居らぬ。夫で、此の根性は如何云ふものであるかと言ふに、商賣とか、利益とか云ふものに關係した時に尤とも明白に分かる。丸で町人根性とは違つて居る。

◎士族の敎育は、君の馬前に打死することを目的としたもので、固より私利私己の事を一番に悪いものと敎へた。夫故、まうけるだの、工錢を取るだのと云ふとは、何か道德に適はんとのやうに思はれる。よし不道德ではないと思ふ丈けの理屈は分つて、高尙の事ではないと云ふやうに感ぜられる。夫故、まうけると何か相濟まんやうに考へて、何となく心中に耻かしく感ずるとがある。之が士根性の一の特色である。夫故、士族が商賣をする時には、少しも夫に安んじて居ぬ。安んずるやうに見える時には、何か言譯を仕て居る。國家の爲であるとか、之でまうけて別に一事業を起すとか、或は其利益を義捐するとか云ふやうなとを目的にして、夫で暫らく商賣の汚らはしいとをも仕て居るのだと言ふ。先づ當分の出稼ぎで、追ては本宅に歸る、まうけ事は當時の辛棒で、遠からず我が眞面目を露はすぞと云ふやうな氣構へである。夫故まうけるとが大膽でない、益の取り方が少ない、計算に無理が出る。士族の商法と云つて、大抵は損をするのが、先づ十中八九である。

◎吾人の好みから言ふと、士族が大好きである。或る點から申さば、士族流義でなければ、趣味が合はぬ。もし極端に言ふと、町人は絶對に嫌ひな所がある。どこか一ッ大切な所の感覺が欠けて居りはせんかなどゝ、失禮乍ら思ふともある。然し、商賣をするに當つて、士族の言ふやうな事を言のは、大相な間違ひで、之は高尙なのでもなく、品の好いのでもなく、質は譯が分らんので、左樣な不忠實な考へでは、商賣に失敗するは無論の話しであると思ふて居る。商賣に限らぬ、何にせよ、左樣の不眞面目の考から事を仕ては、必らず破れるものだと考へて居る。夫で、士族なり、士族流義なりの人に一言其の道ちを言ひたいのである。

◎すべて仕事には忠實でなければ成らぬ。別の言葉で言ど、

仕事に貞節があつて、之に至誠が充ねば成らぬ。之を利用すると云ふ考では、決して成就するものでない。我心に既に間隙がある、即はち不誠實であるから、其の仕事が成効する筈のものでない、成効しても夫は僥倖で、決して眞の成効とは言へぬ。今ま、士族が商賣をするに當つて、之れが爲めにするとか言つて別に目的を立てるのが既に間違ひである。其の目的があれば、ナゼ直ちに其の目的の爲に盡力せぬか。此の目的があり作ら直ちに之に身を投ぜず、暫時まはり道を取り、一時の方便に身を寄せて、早手まはしの工夫を試行するのであるが、何ぞ計らん、之は早手まはしでは無い、終局後れるのである。若し商賣をすれば、商賣が目的でなければならぬ。商賣を仕作ら、商賣を嫌ふと云ふ、嫌らひで之に從事する筈がない。何事にせよ、好きで〳〵、全心全力を盡してさへ猶ほ及ばざるよと恐るゝものを、商賣などと云ふ一時一刻も氣の許せぬ激烈の競爭の中に立ち、奇術詭計の勝と手腕とを要する戰場に於て、かやうに怠けた、かやうな不忠義な考へであつて、如何にして成効しませうや。其の劣敗するは無論の事である。

◎商賣を目的とすると云ふと、士族サンの氣に合はぬのである。然し夫は未だ分らぬのである。人間には人間の大目的と云ふものがあつて、百姓にせよ、町人にせよ、犬ころしにせよ、首切役にせよ、人間たる高尚美妙の目的がある。此の目的を忘れて、利己私慾の奴隷となつて仕舞ふのは、何よりの醜態なことである。此の人間の目的として理想する所は即はち、士族などが大いに好く所で、士族の氣風はやゝ之に近いやうに教へられたのである。されば、人間の目的として、此の理想を懷ひ、此の理想を行ふべきとは無論の話しであるが、扨て餘儀なく一つの天職を受け、一つの實業職分に身を任じて居る間は、職業から言へば、社會の人としては即はち其の仕事を目的とせねば成らぬ、之に不忠實であつてはならぬ、決してあだし心をもつてはならぬと云ふのである。昔し君に二心なきことを本旨としたる士族は、今の其の天職とする仕事に對しても亦た二心ではならぬ。既にもし商賣を天職とせず、外に其の職分とすべきものがあるならば、直ちに之に身を投ずるが宜しい、後に之を爲すなどと云ふは決して善くない。たとひ夫れ丈けの便利と便宜とが無いにせよ、既に終生の職

分と定めたものがあるならば、其に向つて草履でも取り、奴隷にでもなり、而して追々經驗し追々立身するやうにするが宜しい。左なくして一時金をまうけて、而して後ち之に從事するなどと言ふやうでは、固より眞にまうかる筈もなく、又た、何時と云つて其の目的の方に轉ずべき好機會もなくて一生を不平の中に送り、いつも／＼忌や／＼乍ら世を送ると云ふやうになるのである。必竟は、其の考へ方が間違つて居るのである。

◎左れば、士族にして商法をする位ならば、其商法を君主と思ひ、其の馬前で打死するも決して身を引かぬと云決心で、一意不亂の忠義心を振ひ起し、大膽勇猛に大まうけをするが宜しい。之が即はち商人となつたる士族の武士道と云ふものである。商人となり乍ら、之を嫌ひ、二心をもつて之に從事し、他日外の所に身を轉ぜんなどと云ふのが、所以る、二股士、臆病武士と云ふもので斷じて士道の許さぬ所である。

美装論

◎女に美のなきは、花に色の無きが如くで、極めて無風流なものである。本來、天地間に美のある所以のものは、至極の幸福で、神が、人を愛するの賜物である。之を眺め、之を賞め、之を嗜ふは、人間至當の天性で、むしろ其の必要物件と言はねばならぬ。美を愛するの心よりして風雅を生じ、美を慕ふの心よりして人情を生じ、初めて人の性質の美を發揮するほどのものゆゑ、美は貴んずべきで、輕んずべきでない、道徳に順つたるもので、中々罪なとどいふべきものでは無いのであるが、兎角、其の際に溺れて、其の下等なる點に拘泥するものゝあるよりして、美を惡むの念も折々は世に勢力を得るやうになるのである。

◎男にも男の美あれど、夫は暫らく擱き、女には取分け美と云ふものが充滿せねば成らぬ。女は美の天使とも、權現とも言つて、天地間の美の大問屋である。此處で豐かでなければ

他は何處も究乏調楽として、至つて面白くなくなる。

○其故、女には、美の心掛、美の遊戯、美の装ひが至極の大切であるが、然し美の装ひと云ふは、必らずしも衣裳化粧の装ひ斗りを言ふのではない、人の目に現はれて、美くしい姿形の見ゆる総べてのものを皆な装ひと云ふのであるが、扨て此の美の装ひと云ふものが、先づ尤とも普通の婦人にでもなくてならぬのである。

○左様に言ふと、生れつき不器量に生れた婦人は、迚も美の容貌に栄を現はすことが出來ぬと言つて失望する人もあらうかなれども、夫は誤解で、美の装ひと云ふものを極めて低く考へる人の言ふことである。成程、夫の痩せる顔は言つて、表にも透き通るなど云ふほどの美しい姿は、先づ〱美くしいと云ふに差支へはないようなもの丶、之が必らずしも女の美として人の心を惹くものとは言へぬ。よく世の中に人形のような美人があるが、少しも人の心を惹かぬ。夫を評して愛嬌が無いからだと云ふが、成程、美はあつても愛嬌が無いからだとも言へるが、抑も其の在る所の美が下等で、優れて居らぬから愛嬌とならぬので、申さば美の低いものと言ふて宜しいのである。斯様に、生れつきの美は必らずしも美の為に必要のものとは言へぬ。生れつきの姿形はよし醜くとも、別に一種の美を發生して、肉體の醜を覆ふことが出來る。

○前年新派と云ふ役者が芝居をするのを見たとき、彼は當時眼病が重つて片目を覆ふて居た。然るに、此の片目を覆ふて居ることは少しの故障にもならんで、丸で其の劇中の人に必要必然の病のやうに見えて、少しも其の美を失はしめなかつたと云ふことがある。醜婦が一種の美を發現して、其肉體の醜を忘れしむることは、丁度此の工合である。

○扨て、女の美の勢力は、人の愛を惹いて、一生の運を定めさす絲となるものであるから、其の人の美の階級が丁度引きよせらるる人の階級に適當するのである。喩へて見れば、雑魚はザコ、鯉は鯉、鯛は鯛と、夫々、釣針が違ふ。女の美も、其の美の等級につり上る獲物が違ふことゆゑ、其美の品格を高尚にすればするほど、獲物の品格も亦た上等になるのである。左すれば、好んで下等の美に安んずると云ふは、決して女たる人の本意ではなからうと思はれる。

○夫で、高尚なる男子の趣味を聞いて見るに、決して造り付

の美人の如きもの、虚飾の粧はひを爲す美人、人に驕り高ぶる美人などを好まぬ。たとひ其天成の姿は美くしからぬとも、風采風姿と云ふ教育から發した光采と、心の貞正純潔な所より發した從順清艶な姿とを以て、女の美の第一等のものとなし、之に向ふて愛戀欣慕するとである。左れば、女が其の裝ほひに對する氣品の高低如何んは、さしわたり之に引付らるゝ人の氣品の高低如何に相應し、所以ゆる似たもの相結んで相應の緣を成すものと見える。自由結婚と云ふ名義が濫りに濫用されて居るが、精靈自由の直覺によつて相撰ぶとの當を得る一つの理由は、亦た此の邊に存するのである。

◎左れば、願くは世上十方の佳人、其の美裝を高尚にして、高尚なる人の氣品に適ひ、以て其の緣を高尚にせられんことを。

三輪川の清きながれにそゝぎてし
衣の袖を又はけがさじ　玄賓僧都

高等女學校の教育を論ず

岡村

今や高等女學校は公私立を合して二十有餘の數となり、なほ更に増加せんずる勢なるのみならず、近日高等教育會議にても、これに關する條令の議せらるべしといひ、其條令とは果して如何樣に決定して發布せらるゝや否やを知ざれども、兎に角に、いよ〱高等女學校令發布後には、續々として、其新設せらるゝものあるは自然なり。まことに高等女學校の全盛時代の來るは眼前の迫きに在りと知らる。

教育は素より容易の業に非ず、中にも女子教育の困難なる事は、識者の等しく認むる處なるが、扨て又高等女學校の教育なるものは、最も難險の事業たるは、今日現存のものに就きて、社會の既によく經驗せる處なるを感ぜずんばあらず。之を思ふて、將來多々益々新設せらるべき高等女學校の爲めに、其教育の至難なるを說いて、嚴に三省を促し、以て預め深く慮る處あらんことを要求せざるべからず。

當今官的教育の弊は、其形式に流るゝに在り、就中、其甚だ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しきを女子教育に於て見る。先づ其手近き例よりいへば、男生徒の舉動消退は、男子丈と見許す處多ければ、自然に寛大なれども、女生徒に至りては、之を規すること頗る嚴密にして、こは素より當然あるべき事なりと雖ども、官的教育にては、こはたゞ規則に流れ、形式に走りて、發覺するに無用にして、且有害なり。小學校はじめ高等女學校に至るまで、女生徒の服裝の華美に流るゝを禁ずるは一般の風なり。こは父母が情に奔りて考へのなきの致す處、學校にては出來る丈儉素の際を縮めて、また貧寒女兒の就學を奨勵する便とせなさしめざるべからずと雖も、これを制限することを精神的教育より入りて、生徒自身の覺悟を開發するに非ずして、徒に空文の規則を以て押へ付けんとすることを今日の如き状態にしては、遂に何の効もなし。曾て某高等女學校長と語る、校長曰く、我校には、女生徒は衣類は綿服に、頭髮は束髮及上品姿に、幹は校章附の洋傘製に、下駄は前まきに限り、白粉紅を禁ず、違反者あれば、登校を許さず、毎日校長自身、生徒の服裝を點檢し、下駄の如きものは、假令表付ならずとも、高價のものと認むるときは、容赦なく校長室に引上げて、退校の際受取に來るものを一々嚴戒するなり。かやうにすれども、なほ反則者を生じ易く、また校門一歩の外に在りては、如何に華麗を粧ふとも、之を制するに途なし。白粉紅等を禁ずるも、登校の際丈は、大方素顏なるが、却て月曜日の朝となれば、前こそ地のまゝなれ、頸の真白なるが尠からずと。この話、以て規則訓戒の如何に無効なるかを知るに足らずや。また往々聞く處によれば、小學校以上にて女生徒に、特に儀式の節などに、美裝を禁ぜらるゝを以て、平素は絹服を纏ふものも、祭日などには殊更に綿服を着するものありとぞ。されば彼等が質素を粧ふは、たゞ止むを得ずして、規則に從ふに在るのみにして、これも校紀を維持する上に必要なるべけれども、生徒をして、表面上規則に從ふの利を知らしむるは、教育上、甚だ貴ぶべき事に非らざるなり。

女學校の寄宿舍は、これを治むると、其正しきを得なば、女子教育の大部分は、教場よりも寧ろ玆に於て成就せらるべしと雖も、もし之に反して正しきを得ざらんか、折角の千訓萬誨も實効なきに了はるべし。女學校寄宿舍が殆んど工女寄宿

舍の狀態をなすこともあり。寄宿舍敎育の事難いかな。之を治むること、校長敎師また舍監等の肺肝より出づる熱誠を基とするに非ずして、敎員會議の決議たる嚴重なる規則を基とせんとせば、寄宿舍は、甚だ以て女生の風俗精神を惡しきに導くに了らんのみ。今の高等女學校の寄宿舍たるや、往々にして、後者に陷ることを免れ難し。けだし一個の人物を中心として組織成るに非ずして、組織成りて後に、中心者を雇ひ入るゝ學校にては、其根本規則に在らざること能はず、即ち從つて規則論の弊は歷々として起り來るも止むを得ざるなり。凡そ法規なるを加へて、罪を犯す巧なることを增すものなれば、他の私立女學校に比しては、規則甚だ嚴なる高等女學校の寄宿舍が、舍監等の目を竊んで禁事を敢てするに巧にして且つ大膽なる女生徒を生せざらんとするも得んや。現に摸範的高等女學校と稱すべきものゝ寄宿舍に於てさへ、此事ありと聞くに非ずや。

規則を偏重して形式に流るゝの弊には、女生の起臥進退を規するが上に於てすら感ずる處なるが、扨て又學課上に於ても、諸事形式に走るは、今の高等女學校敎育の一大弊なり。社會の女子敎育に要求すると遠大なるものあり、女子高等敎育を授くるの是非を論じ、女子大學を設くるは早計なりといふものゝ、其意は、女子の腦力の能不能を斟酌するが爲なるに、なほ高等小學より始じめて、女子の學ぶべき學課は其數いと多く、高等女學校に至りては、學課の煩雜なること、迚も尋常中學の比には非らざるなり。理科文學より、裁縫、茶の湯、挿花料理の末技に至るまで、女子は一々之を學ぶの要ありとして、高等女學校の規則によれば、凡そ女子に必要なる百般の學藝を、洩れなく授けんとするものゝ如し。彼京都府高等女學校は、此種學校中の木鐸にして、また指南車たり。其報告書を見れば、學課の整頓せるよりいへば、實に驚くべき計なり。また曾て大阪市高等女學校を參觀したるに、生徒數は七百を超えたる多數にて、彼處に諸を學ぶものあれば、此處に料理を掌るあり、裁縫あれば刺繡あり、藝の多技なると目覺しく、學藝の事も推せらる。其中、音樂には、琴、オルガン、ヴイオリンの三科あり、而して其三科共必修科なるを聞いて、更に驚きたり。凡そ高等女學校敎課の多技多端なることは此類にして、到底六年もしくは三年の年限を以て修め得らるべ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

きものに非ず、學業の事は何年かゝらんも、畢竟際限なき事なれども、また其度其度に於て効用ありと雖も、藝に至りては、如斯き教授法にては、いづれも、初歩をカヂリたるのみにて、遂に何の得る處もなし。女子に於ける諸藝は、社會の最も必要なりとする處なればとて、カレコレと多くを授けんとするは、無用の勞を致さしむるのみにして、其女子の一生に於て益する處なく、寧ろ一藝に於て優れたるの用あるに及ばざるや遠し。要するに高等女學校の教育は、女生をして、諸科を習ひたるの名あらしめて、知得たる處いと少からしむるものなるの外なき事能はず。されど高等女學校の教育たる、單に女子が嫁入るに當り、嫁入口に上る資格の多々たることあらしむるを目的とすれば可なり。然れども、如斯きは教育其者の主旨に非らざるを如何せん。

なほ又、將來高等女學校に來るべき弊害は、現在、尋常中學校の之が爲に苦厄せる如きものあるべきなり。見よ尋常中學校にては、形式的教育の結果、生徒をして信仰の念を失なはしめて、反抗心を釀成し、彼等をして教師を信用せざらしむるを一大弊とし、加ふるに、校長以下教師が給料等の爲に、轉々移動して、一校に二年以上在勤するもの稀れなるより、自然教師にして、愛校の念なく、從つて生徒と、教師との間に、斷ち難き情愛を生ずるの道あることなし。これ實に教育上の最大欠點にして、これより引續き起る諸弊習の爲、兎角學校内に常に平和なく、生徒は絶えず不滿を抱き、心ある父兄は、また學校を信用せざるに至ること、これ正に當今、屢々目撃する事實なり。然るにこれと同樣の狀態は、また必ずや高等女學校の上に落下すべく、其校數の增加するに從つて、其危機や切迫せん。高等女學校には、多くは女教師を採用せん、女は由來保守的にして、移動を好まぬものなれども、扨て女教師同士間の折合のつき難き事は、男教師間の比に非らざれば、移動し得べき學校多く、從つて機會多き時には、また轉々、種々と彼より此と任を變ふるなるべし。且又、女學校には女教師を可とするの說は多けれども、女學生等は、多くは女教師と親和し難き傾向あるは、今日までの實驗に徵して、其道の人の承知する處なり。これによりて見れば、將來高等女學校には、尋常中學同樣の不平和の生ずることを免れざるべく、女の意地惡きストライキも。必ずや屢々起るなるべ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

し、爰に至らん乎、父兄は、學校を信用せざること丶なるは當然なるに、彼の男生にてあれば、父兄が學校を信用せぬながらも、教育させずにも置けぬを以て、督勵して勸學せしむるなれども、女子に至りては、父兄はそれ程に教育の必要を感ぜざると、また其身上を氣遣ふことの切なるものなれば、彼等が一旦、學校を信任せぬとならば、容赦なく退校せしめて、校内爲に落莫の感あるの時なきを保證し難し。これ實に高等女學校なるもの丶組織より、推知せんざらんと欲するも、猶且つ能はざるものなり。

凡そ官的學校の危機の伏する處は、其の人物を中心とせず、規則を基礎として、これより自然形式に流る丶にあり。高等女學校も亦正に然り。されば、吾人は、自今、ますく\高等女學校の增設を見んとするを賀すると共に、其教育につきて、危殆の念を抱くこと切ならずんばあらず。敢て思ふ處を述べて、文部省以下、高等女學校教育の局に當れる人士の參考に供す。

秋風の更る夜さむに眞葛原　春湖
うらみなれてや弱る虫の音

●都會の女子と田舍の女子と

かもめ

都會の女子こそすさまじきものなれ。まこと都會風といふは、長火鉢の傍に安座して、長煙管スパく\と吹き、下女は成丈顎にて使ひ、日風呂に化粧を凝し、新聞又は小說を讀み、遊藝は出來ても、必要の技に拙に、芝居寄席の噂をなすに長ずる有様にて、こは極端の例なるべけれども、要するに、都會の女子の、實に、暇多くて、氣樂げなること、上下、おしなべて皆然り。我等、かつて、都に上り初めし當時は、殊に見馴れたる母、姉其他一般の女子に比較して、ていたらくの如何にも異れるに一驚を喫したりき。

然るに又、當今、教育ある女子は、概するに、學藝に凝るが故か、はた又様子振るが故か、狀態、如何にも都會の女子の伍に在りといはざるべからず。

これに反して、田舍の女子こそ殊勝なれ。農家は殊に然り。大家の細君女兒に至るまで、なかく\、長火鉢の傍に、坐蒲閑敷く暇のあらばこそ、一日中目のまふやうに、家政に勤

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

労しまた蚕業に勉む。既に中流の家となれば、自ら四季の田圃に出でゝ労働し、綿をかひ、糸を紡ぎ、機を織り、其他手に叶ふ内職は、出来る丈、これをなす。其他の家事はいふまでもなし。彼等は労多くして暇少なく、年に一度か二度の慰み遊山をするが、せめてもの気晴しなり。されど苦を喫く事なく、勤労を以て任とし喜ぶ。下流に至りてなほ更に然り。また農家ならねも、市町にても、土着の女子の勤労するとは同様なり。彼等は、移住し来る都会風の女子のだらしなきを笑ふ。田舎の女子は、新聞を読まず、時世を知らず、学問を知らず、遊戯の心掛なく、たゞ日用必需の業務に油断なきなり。而もそれのみならず、越後、房州、伊豆の女の如きは、都会にては、迚も思ひ及ばざる程の労働に従事して、往々亭主を養ふ力あるを以て、甲斐性あるものと賞し、これを理想とすることあり。

都会の女子は多くの暇を有し、田舎の女子は労を厭はず、田舎女子の、男子に抑制せられつゝ、労働して、而して、無智無学なるは憐むべきか、女権伸びてその自我に引かれて、痛歎せんとするか。亦都会の女子、及び女性生活の婦人が、気楽げなるは、女子として羨むべきことなるか。されど、勤労は人間世に処するの至当なれば、吾人は、女子の天分、いな人道としての天分を盡くすの点より観れば、都会の女子よりも、無乃田舎女子の殊勝可憐なるに與みせずんばあらず。而も彼等の無智無学を歎ずるとなく、劇労を喫くことなく、平然として、世に処するや、吾人は其平和幸福なるを見て之を羨まずんばあらず。

女風俗報告集

（一）

土佐國高岡郡西津野村
伊藤祐綱

一 男女交際の有様
未婚の子女の交際至て親密なるも世間の制裁は至つて寛なり女子を卑しむの風を見ず

一 家庭に於ける女子の状態
家庭に於て女子を訓育するの状なく所謂行き成りの風あり玩具の目立つものなし

一 主婦の義務權力財産等に於て特別なるものを見ず

一 下女の風習雇入れの方法規約役等が風儀及び下女に對する家族の状態
下女を雇ひ入るゝには他縣の者を嫌ひ多く土地の者を雇ひ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

入るゝ故風俗の異なることなく雇ひ入れの方法等は至つて簡にして別に規約を設くるなく下女に對する至つて親密にして恰も家族に異なるとなし故に一家に數年雇はるゝもの多し

一　女子嗜好の傾向

女子に於ても一家の榮えを専ら心掛け芝居見物種々の遊に心を寄するもの稀なり

一　婦女子勞働の狀態

勞働の時間十時間一日の賃拾錢位にて十三歲頃より勞働し暫時增加の傾あり婦女の從事する職業八九分は農業男子に比して稍少なきも大差なし婦女勞働者自己の生計を支へ得べし

一　婦人の慈善事業なし

一　婦人會なし

一　婦女子教育に關する一般世間の意向

學齡女子の就學割合は男子に比して四と六と位なり

一　女學生の風紀

縣に高等女學校あり産婆學校等あり就學するもの日々に增加すと雖も歸後成蹟の著しきものを見ず

一　婚姻離婚の方法及び再婚に對する世間の思惑

婚姻は總て早婚の弊あり女子は十四五才男子は十七八才に至れば結婚するものあり夫婦年齡は著しき懸隔なし通常婦は夫の三四才弱なり初婚大抵女子は十七八才男子は二十一才前後なり婚姻の儀式は近來大に亂れ爲めに格別なる式を擧げす殊に自由結婚の弊風あり男女密約を結び父兄に談ぜず女子を誘出して連歸るもの多し此の場合に於て女の父兄は少しも不服を抱かず反て之れを欣ぶの風あり

離婚の方法なし再婚は一般嫌賤の風あり

一　女子の風俗

五六才の頃迄は大方「けし」坊主となし八九才に至りて垂髮となす十三四才より十八九才迄は「いてふ」返しを結び二十才の頃より俗に「わげ」と云ふを結ぶ（そくはつは殆ぜり）既嫁者は皆東京形の「ほんだ」を結ふ、帶は大抵「むすびさげ」流行す

涅齒眉剃は漸次衰へ中等社會以上は皆無の有樣なり只山間に古風を存するのみ茶屋女密賣者なし私生兒は最も多し飲酒喫烟は稍增加の摸樣あり尤も十四五才以上なり

一　服裝は極めて樸素を旨とし驕奢の風なし

近來教育の普及せしより女子の精神活潑なり

履物は大抵表付の下駄にして降雨の時は　さし下駄」を穿つ草履を履くものなし必用なるとあるにあらざれば格別なる手廻りなし

一　縣下一般に神道を尊崇し敬神を旨とす

宗教は佛教稍々盛んにして基督教も近來少しく崇信者あり

一　尼巫女妾等に成るものなし

尤も他縣より來り妾となるものなきにあらず

一　女子言葉は皆優美にして返答には「あい」なる言を用ゆ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一 女先生には山内初女なる人ありて教育に熱心家なりしも不幸にして早世せられたり

一 婦女子は關する古跡口碑なし

一 婦女子の他國に出稼ぐものなし

一 密賣淫者娼妓と關する口稱呼方俗謡の事項なし

（二）

栃木縣鹽谷郡喜連川町　小島喜一郎

一 男女交際の有樣

未婚子女の交際に關する社會の制裁は嚴然たり其最たる徴證は婚期に先ち發顯せらる即ち婚姻締結の場合に當り双方身元の視探に際し不品行の素行あるに於ては世間の嫌ふ處個人の恥ずる處となるなり而して子女交際の素行を嚴守するは重に士族者にありとす又因襲の久しき男尊女卑は免れざる處たり

二 家庭に於ける女兒の狀態

家風庭訓教育上の特色なり古來の慣習として父母兄たる者は女兒學文の不必要を感じ十四五歳に至れば機織（自家用）裁縫等には留意するも女兒成年に達し母たり妻たるの時期に當つて育兒法知得の必要、一家内政の心得、外に在ては夫の交際を補助する任を負はざる可らざる等のとは殆んど思はざるの狀態なり而して地方屈指の資産家女兒は挿花、三味線、茶の湯等の藝を練習するは僅々たり

三 主婦の義務勢力財産等に於ける特別の狀態

主と共にあるに際しては主の業務を補助し主不在なるときは家族の監督其他業務の整理等主に換て從事するの風習あり是れ其婦の義務なりとす從て其勢力たる家族の上位にあるは自然の數たり財産に關しては特有の慣例なきを以て共有たるものゝ如し故に離婚等の場合に際しては財産の分割を請求する如き狀況たり

四 下女の風習其雇入の方法規約彼等が風儀及ひ下女に對する家族の態度

下女たるもの大概無教育者なるを以て己れの欲望を逞するに不充分なるか待遇の嚴なるに遇ふときは主家に對する義務を忘却し主家内に於ける秘事を漏泄し或は誹謗するの弊風あり其雇入の方法たる雇人請宿業者に依るあり知己の周旋に依るあり何れも年期給料等の契約をなす而して主家の為めに身を立つるもの僅々たり又主を初めとし其家族は下女に對する恰も人類視せざるものゝ如し

五 女子嗜好の傾向

父母の從事する職業に依り大に其趣き異にす即ち父母の從事する職業に追從する習慣をなすものゝ如し母藝者なれば其女又三味線踊等を好み父教師なれば小説を好むが如く然り而して芝居踊等は一般に好み高等小學卒業者等に在ては小説稗史を好むあるも僅々たる狀況なり

六 婦女子勞働の狀態

婦女子勞働の時間とては會社組織に依るものを除くの外

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

制限なく一日の賃銭は業務に依り差異ありと雖も現今十錢乃至廿錢にして幼女と雖とも生計の程度又其境遇に依り勞働するの狀况たり實に諸物價の騰貴は婦女子の勞働增加せるや明らかなり而して諸會社に於ける工女の風儀は前四項に掲記せし下女の狀體に彷彿たり今其從事職業の區別を試むるときは糸取、機織、煙草製造に關する葉卷、養蠶業、農商業の補助等なり而して其勞働の過度なるやは否やは業務體力の如何により異差ありと雖とも諸會社の工女の如き或は過度なるやの嫌ひあり常に男子の勞働に比し重きを視認せり而して婦女は自ら其職業を撰擇するの自由を有せず父母の指示に依れり婦女勞働賃の得る處は十二歳未滿は其の生計を補ふに足らず十三歳以上に至れば生計を補ふに足るのみならず其職業に依り餘裕を生ずるに至るなり

七 八 婦人の慈善事業及婦人會

此二項なし

九 婦女子の教育に關する一般世間の意向女學校の狀况學齡女兒就學の割合等

婦女子の教育に就ては冷々淡々と評するの外なし從て義務就學期は入學せしむるも高等に入る者は僅々たり女學校なし

十 學生風紀の項

本項なし略す

十一 婚姻離婚の方法及び再婚に對する世間の思惑

初婚の年齢男子は廿歳前後女子は十七歳前後にして敢て早婚の弊なし夫婦の年齢懸隔甚しきもの後妻者に在て見る處なるも僅々たり婚姻の儀式は漸次簡略となるの趨向あり離婚の方法たる雖に媒酌の任に當りしものに談じ特別の場合を除くの外離婚容易なり

十二 女子の風俗

十五六歳迄の頭髮は（イチョウマゲ）十七歳以上婚嫁前は（島田マゲ）多し又結帶は（カヒノ口）（下ゲ帶）の類蛩眉剃は大に減少せり茶屋女、私生子漸次減少の傾きあり密賣者は當地は更になし（最も東部內將た縣內を通せば增加の景況たり）婦人の飲酒は減少せしも喫煙者は稍々增加の狀を呈せり又女子は殆と男子の奴隸たる如き狀况ありしも交通教育等の影響に依り思想の發達は徵すべきあり

十三 殊に目立ちたる女の服裝履物手廻道具等

本項特記すべきものなし

十四 宗教上に於ける婦女子の信仰事業團力

若年者は概して信仰心なし只老女の不動尊を信ずるあるのみ神佛祈願等は漸次衰ふるの情況たり

十五 尼巫女妾等となる婦人

土地の婦女多し尼巫女妾となるを殊に忌むなり

十六 女子の言葉に關する特別の氣付き

男女普通に用ふる語多く女子特殊の言葉を認めず

十七、十八 女先生、女先從、並に婦女に關する口碑、古跡

無し

十九 婦女の出稼人につきて

特記すべき事柄なし

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

二十　密賣者及び藝娼妓の稱呼並に此等に對する感想の輕重

密賣者を目して（ダルマ）（茶屋女）と云ひ娼妓を（女郎）と云ふ而して此等に對する感想は重からず

（三）

大坂市　樫内断子

婦人が一面識もなき人の家を訪ひ主婦よりも先づ其の家の主人に面會せしとき主人が客なる婦人に向てやゝ傲然たる樣子のある人は自分の細君の無教育をあらはす看板の如しと思はれ又其の家の主人が客なる婦人を少しも卑しむる風のあらざる人の細君に面會して見ると大方は教育ある細君たり是によりて見れは男尊女卑多くは女子無教育の科によると思はる

未婚の男女交際は中等以上の家は多くは嚴なるが如くなるも中等以下は不然もの多し男女双方共教育あるものは同等の樣を有する交をなせり此頃青年男女間に於て青年男女が女子に向て「君はね僕はなあ」こふ言葉あるを見受く

「花、茶、琴」は大に流行し大抵の家の娘は皆なこれを習ふ各女學校にても世の風潮を逐ひ是等專門教師を特に聘用せり

婦女子勞働者の多くは紡績職工なり兩三年前迄下女奉公を以て滿足せしものが職工に雇はるゝ方日給多く又晝夜主人に束縛使役さるゝの者に比すれば夜業をつとめ徹夜をするを免れざる譯ながら紡績の職をも何ほ優れりと思ひ我も／＼と同職工となるを望むもの多きが爲め一時は何れも下女の拂底を來たせしが近頃は世の不景氣の影響にて紡績事業以前の如く盛ならざると物價騰貴して日給を以て支ふるにやゝ困難を覺ふるに至りし爲め田舍より來るものゝうち下女奉公を望むものも追々出來しよし

女の服裝等至て華美に流れ裏店屋より出入する女が富家の婦女と同じく華美なる服裝をなし冬はアヅマコート、春は風通縮緬を競て着す

大坂は稻荷を祭るもの尤も多し別て鉄工をなす家湯屋床屋妓樓等に於て信ずるもの多く又はれ／＼しく祭れり

女學生の言葉の中當地にて尤も目立て聞苦しく且女學生の外に聞かざる言葉あり即ちウチヤ知らんで（私は知らぬとの事）止めてんか（止めてほしいとの事）是等の言葉を言ふとき一種のなまりあれば何以て聞苦し

町内に於てお針屋と唱へ裁縫のみを教授する昔風の家あり之に通ふ者は日々芝居役者の評判をなすとは常なるが女學校（キリスト教に關する女學校を除く）生徒にて家に歸れば急で新聞の小説を讀み翌日學校に出れば其小説につき朋友相語り合ひ是を唯一の樂しみとなせるあり父兄等は知りてか知らざるか丸で無頓着なりたま／＼親等のつぶやくは學校より歸ると直に新聞斗り見て居て家の用事はせずと叱る位の事なり

まりこもの網みもされて飛すしき
みだれゆく世の秋ぞかなしき　蓮月

教　育

體育論

◎體育の論やうやく起り來れるが、其の理想は極めて低きものなり。尙ほ、體育論中の初歩と云ふべし。初めて之を西洋の體育論に得たるが如く主張して、而も其の尤とも幼稚なる觀念に泥み、日本在來の體育の極めて高尙なりしとに氣も留めず、斯る事のありしとも思はぬげなるは、扨ても心なき業なり。

◎體育は敎育なり、體よりして敎化を施すを主旨とす、必らずしも、體そのものを目的とするにあらざるは、猶ほ、智育に智性そのものを目的とせず、德育にすら德性そのものを目的にせざるが如し。要は、此の門口よりして其本體を敎練せんの主旨なり。體育の主點、豈に何んぞ八個五體の肉身にのみ關するものならんや。

◎若し單に身體を丈夫にするとをのみ主旨とするにあらば、百姓土方などは、體育部の優等生にして、而も卒業生なりとするに恥ぢざるべし。然るに、體育の目的は體そのもののみにあらず、體より入つて其心を練化せんとするにあるが故に、此に達せざるものは、體育の目的に適へりとせざる也。

◎日本在來の體育は深く此の目的に重きを置き、所謂ゆる敎育二大部の其一たる武育は、主として體育とも稱す可き者なりき。而して、此の武育の目的の單に身體操練にあらざりしは勿論、其の武藝の練達にすらあらざりしを見て、古の體育たる其の武育の如何に高尙なりしかを推察すべし。

◎然るに、今の體育を言ふものを見るに、毫も此邊の氣付なく、只但、身體を運動して、筋肉骨格を丈夫にするとをのみ理想にする如し。淺ましき敎育者にはあらずや。凡そ如斯き體育は、稍ともすれば衞生的神經質を刺戟するの外効能あるとなし。文明人の往々蠻勇者に劣敗するは、斯る體育論の餘弊なり。現に西洋人既に其の俗に殺たりつゝあるに、我同胞何んぞ其の盃を分つべけんや。

◎もし身體を丈夫にするとを體育の唯一の目的とせば、何んすれぞ、之を蠻勇的にして、雄野剛健たらんとを要めず、反

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

つて文明人の都雅優柔なるに倣はんとはするや。單に身體の事を主として言はゞ、文明人は到底野蠻人に及ばず、左らば諸君の體育は寧しろ野蠻人の體育に學ばざる可らざるに非ずや、何を以て反つて西洋人に學ばんとするや。

嗚呼、近頃の體育論も亦た西洋流摸倣の一のハヤリのみ。惜しい哉、其の皮相を學んで、其の精神に悟らず。愚然として幼稚なる見解に泥づめり。惟ふに、體育論の品格も今一段進步せざらしめざる可らざる也。

曲學阿世論

曲　論

學者の時務に疎きは、なほ學者らしき處ありて、愛らしけれども、世には一流の學者の權利を振り廻して、殊更に、學を曲げて、世に阿るの徒尠からず。これ自ら爲にする處あらんとして、學問の範圍外に逸して、無學の小民を煽動するものにして、實に學者らしくもなく、野心の勃々たること見え透きて、苦々しき限りなり。

是等曲學阿世の學者連は、博士、學士の空號を武器として、衆愚の輿論と、甚だしきは、神聖犯すべからざる者とを楯となして、迷論以て世を惑はさんとするものなり。彼穗積の憲法論の如き、井上の宗教と教育との論の如きは亦た彼の尾崎文相の所謂共和演說と稱するものに對して、恥かしげもなき愚說を並べ、また個人主義は國體に害ありなどと說く、一流の學者先生の如き實に此流なり。彼等のなす處を觀るに、平素事なきに當りては、歐米新進の學說を祖述するも多少事のありて、野心を鼓舞せらるゝに於てや、常に祖述する處に反して、途方もなき議論を弄ぶ。其擧動を觀るに、到底學問に忠實なるものに非ずして、學者の本領を知らざるものと評するの外なし。料簡するに、彼等たるものは、學問に於て、經驗推理の功を積んで、古聖賢の苦心の跡に發し、以て我が精神の修養をなす底の、爲學の本道に由るものに非ず。萬卷の書籍を讀破するの力ありと雖も、彼等の務は、讀んで之を記憶することに在りて、假令、學者の名ありと雖も、なほ彼等は學ばざるものなり。即ち彼等の學問は腦髓の一部分に限られて、其心の底には、俗臭紛々たり、彼等はこれぞまことの

俗儒俗學者にして、俗學者の曲學阿世論をなすに、茲より以て如何ともし難し。彼等の如きは捕へて坑にするとも、社會の爲に毫も惜むに足らず。

學者が學者の本分を忘れて、ひたすら、世に阿りて、彼、卑屈極まれる小策士等が、乘取策の爲に、人を離間するの賤劣事に似たる行爲をなすは、沙汰の限りにして、而して彼小策士輩と異なり、自らも人も、共に學者なりと稱するものなる丈に、其行爲は、一層卑劣なりといふべし。羅馬法皇が、ガリレオの地動説を禁壓せんとしたるが如きは、無學に加ふる政略と、純學との爭ひなれば、致方なきに似たりと雖も、學者自ら學を曲げて、小策略の用に供するに至りては、之を嘲罵せざらんとするも得んや。學問の爲に之を痛まずんばあらず。

曲學阿世の俗學者あるは、何の世にも免れ難き處なれども、當今の如きは、社會は甘んじて、之を容るゝによりて、彼等は次第に増長す。而して、よく學問の爲に難る、氣概ある、眞の學者に乏し。豈に歎ぜざるべけんや。

大道甚夷而民好徑

隨感

●賞景歎美のよろこび

天、如何なれば風雅を味はふの美感を人間に賜ひけん。大凡そ有りと在ゆる御惠みのうち、此の賜物のごとき恩惠は類ひなしとぞ思はる。ゆき〳〵て彼水此山と旅し、姿の面白く、流の潔きに接する都度、宛がら心を奪はれたらんが如し。月に松影の地に畫き、朝日に雲の太空に彩るけしき、又は窓外に千帆去つて千帆來り、坐ながら氣笛櫓聲のひゞきを聞く折々なんど、風景の新らしくして、其の新らしき毎に面目のすべて鮮かなる際、涙眼中にあふれて美の情に感泣せずと云ふとなし。惟へらく、眞乎の貧富は風雅を味はふと味はざるとにあらんか。若し美の神に祝福せられて、其の御示しを蒙むり、其御姿の影に伴はれて、到處の風景に樂しむの情感だに與へられなば、凡そ世にありて心に貧しきと云ふとはあらざるべし。左るにても、憫れなるは斯る嗜なみの欠けたる儕

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

にてやあるらん。千金に換へがたき長江風月の眼前自由に施さるゝを味はふともせで、只管ら營利に屈托し、偏へに其失せなんことを日夜に憂ひとす。彼は富みたりと云はんかなれども、風流韻事を解する人の心の樂しみより見ては、却て餓鬼乞食の不憫なるより倚ほ見すぼらしくこそあるなれ。思ふに、不束なる我身の何の取どころあるまじきに、如何なる縁ひにとて斯の道を數賞するの趣味を賜ひけんかと首を垂れて潜念し、感涙のはふり落るを禁めず。寔にも、忝けなきは、此の一つの賜物にてぞありける。

○旅窓のまじはり

苟しくも世に生れつきたることゝ推しければ。假そめの宿りにも知己ありと思ひ定めねば、身を刻らるゝほどに寂しくして夜も眠りがたきを如何にせん。一朝一夕の物語りに、ふと肺腑の秘密を打明けられ、因縁の結びを固うす。去つて久しく之を忘れず、追顧して彼の思ひを念ふ。取や、青山と人情とは何處にあり、寄交の破るゝてふ悲しきといありども、知己は亦た一命酬の折に結ばるゝと云ふ。人間何の心ありて相爭ふことをか為す。互ひに好情を交へて信義を施すの愉快は、何とて其の希ふ所にてあらざるやらん。昔、人あり、行脚周歴して、到る處に心合ひの友を覓め、又た我がほどのものにも、頼らんずる人の心を安んず。斯くして長年を終へ、泰然として強ひて求むる所なき一生など、優にやさしくもあるかな。

○芭蕉と西行

芭蕉の俳諧は、發句以外にあり。此の理を目して單だ歌よみと蔑し去らんは、固より悪さゝるの論なるべし。其の感化は今に及びて恰も一宗の開祖の如く、其足跡は各地の碑に遺りて人皆な之れを榮えとす。蓋、西上人を慕ひて其跡を追ふ。花に憑ひ、月にあくがるゝの懐ひ宛がら先人に似たれど、倚少しく違ふ所あり。感化も亦た同様ならざる所以、理由なくんばあらず。蓋し西行は勤王に慨して、憂國の情より詩歌にかくれ、芭蕉は人を思ふの情に切まりて、人生觀の歎きより俳諧に身を寄せたり。西行もし、日蓮なりせば、芭蕉は親鸞にてやあるべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○大悲の感慨

風雅をさぐり、韻事をもとめて、美を追ふて逍遥遊し、天下の到る處に絶賞す。此際、芭蕉たらんもの、欣喜快樂何ものにか比へんや。左れど、其の多感多恨は、ひとり風流の事に念ひを沒するあたはず。耳に人の爭ひを聞き、目に人の悲歎を見る毎に、慰藉助勢の感慨に堪へず、身を挺して救はずんば休むと能はざりしならん。斯の如くして、風流に足をとゞめ、世話にも亦足をとゞめ、經營にも忙はしく、觀光にも亦た暇なかりけん。而して此は彼の事業にはあらず、たゞ心意氣の自から發動するところなりき。彼を事業家と云はゞには餘まり俗めきたり、歌よみと云はんには亦餘まりに逸人めきたり。彼は眞に慈愛の人なり、其の樂、其の歌、共に大悲の感慨より發す。

●美育

子孫の爲に美田を買はざるは可し、玉樓金殿を讓らざる素より可し。是非に傳へたきは風雅の心にてあるなり。此の心を持つと持たざるとは、性格の貴賤を隔ち、人品の高下をつくる。況んや、日東聖美の國に民となりて、單に唯物下品の好みに一生を了らんは、口惜しからずや。二十世紀・靈氣沒形の事の盛に行はれんの日、優に世界に一種の美を貢獻せんものは誰ぞ。眞に日本神洲の民たるに恥かしからぬものは、誰の子ぞ。父兄願はくは、其の美をゆづれ、教育者望むらくは其の美を教へよ、十方麗美の風土山川、其の精を發して、其の神を普くせよと祈る。

○吾子を傳道者とするの祈禱

若松の衣笠氏、男兒を擧げて之を聖別し、かねてより其の傳道者たらんことを祈禱す。名を賦して聖なる字を與へ、特更らに敬遇して其のいやちこならんことを待つ。斯くして玉兒、齢と共もに麗はしく、神品自から氣高くみえしに、俄然一夕にして死の風に奪ひ去られ、愛務容しく閉ざして呼吸絶え、亦た傳道者の叫びを聞かんやうなし。父母悲歎して、人生の非なるに惑ひ、祈願の遂に空なるを恨み、茫然として暫らく怨嗟を止めざりき。斯の如くして、過去に反省し、將來に警戒

し、天命に發信し、人事に覺醒し、則はち豁然として大悟す。嗚呼、彼の子は實に傳道者たりき、彼を傳道者たらしめよと祈りつる吾等の祈禱は聞かれたりき、彼の子は即はち吾等が一家に對する傳道者となりし也と。

○先生と坊守

心のひねくれたる方より言はゞ、先生と坊守、宣教者傳道者も此中なり）そのひねくれたる程、邪智深きはなかるべし。ちとの冒險もなく、諧謔もなく、痴態もなく、只だ嫌味計りの鬱結したる體裁こそ面白からぬ限りなるべし。彼等は理想と理窟とを知れば、他を責めて之を議論に訴ふるとき、如何にも拔擢なり。然しも容赦せざる其の陰酷は言解かん術もなく、打散らさん便りもなし。かゝる羈絆に引かゝりたる折こそ迷惑なれ。在るにても、教育宗教などに關はりせん人間は、別に心構へして深く資ふ所なかつせば、大抵は斯の病の際に陷らんと必定なり。我は熱心なり、正直なりなど、自から欺むくうち、既に已に此の病の膏肓に入るとあり。其の所謂、到底は偏狹なればなるらん。自から之を救ふの術、他あるなし。他を責むのる前、先づ自から責め、今人と比較するの前、先づ古人に比較し、人間に校量するの前、先づ大天地を思ふにあり。而して、吾が雅量を養成せざる教育と宗教とは、大凡ね吾を惡化しつゝありと自から覺悟すべし。

○花のしづく

花あり樹梢に咲く、すみれあり樹下に開く。すみれ仰ひで微笑て曰ふ、願はくは降り來ませと。樹梢の花莞然として曰く、我が降らんは易し、悲しい哉、落つる時は既に老いたるべきにと。則はち默して言はず、只だ相見て其の盛りを樂しむ。憫れむべし、樹上樹下の花、其の相抱くの時は已でに枯槁しつらん哉。吾、月下の浮雲を望みて樹邊にあり、此のさゝやきを聞きて、屢さめて賦ひけらく、

よし枝の花のしづくにぬれずとも、
香を合せてぞゆかしきものを。

花も亦た應へていはく、

ゆかしさはかねて知どもしらぬ火の
もえてあさなきみをつくしかな。

私立學校論

爪嘯惺

私立學校に對する多くの誤解の中、其の發達の分量を危ぶものの如き、大誤解の一なり。

私立學校の教育は完全なるを得ずと思へるもの多かりしが、近頃は、官立學校の大抵規則的なるに困じ、眞面目にして自由なる教育は只だ私立學校に於てのみ施こすとを得べしと覺りたるもの、少しくはあり。左れど尚ほ、私立學校の發達を危ぶものは滔々として是れ也。況んや、私立學校の性質たる、元と官公立學校よりも宏大に發達すべきものなり」との理由を承知するものに至ては、殆んど稀なり。

夫れ、事業成立の根抵は、個人の品性にあり。此の品性の能く愼忍偉大なるによりて初めて其の事業の大を致すとを得るなり。彼の盛りたる砂の堅牢にあらざる如く、寄集めたる保合物の永く續くべき事業にあらざるとを知らん。永續尙然り、況して其の發達をや。故に、官公立の集合體によりて成りたる學校の、たとひ一時俄かに雄峨たるを得るとも、其の堅牢と發達とは望みがたし。十年一變の時勢によりて盛衰せざるものは少なく、三十年一紀の轉回によりて大率ね其の末期を決するものは多し。所詮、一個の品性、もしくは凝固せる同志の精神等によりて徐々長久に發達し、其の感化を數百年の後に及ぼすが如きものと同日にして語る可らず。

官公立學校の歷史には、個人の品性なし。其の經過は殺にして血にあらず。數學にして生命にあらず。其の進化は土砂の漸やく盛り上られたるが如し、先人の骨相重なつて、遺薫芳烈たるの氣韻毫末もなし。凡そ百年の事業なるもの、豈に斯の如く輕薄にして成立せんや。

故に、私立學校なるものは、其の性質に於て官公立學校よりも多く發達すべきものなるに係はらず、今人の往々此理を忘却するは、近く十數年の假相にのみ眩して、其の大體を洞觀せざるの致す所也。これ豈に卓論ならんや。

今や、機少こしく轉じ、私立學校固有の本色を識別し得べき、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時勢漸やく廻り來らんとす。今にして初めて之に氣付き、亦僅かに其の機構に傚はんとすとも、効益はなけん。私立學校の維持は尤とも困苦なり、其の發達は尤とも遅鈍なり、豈に之を數年の成績に望むべけんや。然りと雖ども、十年其存亡に苦辛し、二十年其の形勢に用意し、三十年初めて其の發現に期するの忍耐だにあらば、凡そ大に發達すべきものは、官公立にあらずして私立にあらんと、其組織の性質に於て、明白ならんとす。然るに、士人特更之を捨てゝ彼に就かんとするは何故ぞや。抑も、速成と急功とを要むるの意か、もしくは長く潛隱するの苦に耐ふ能はざるの故か、二者共に人師たるものゝ抱負にあらず。

好かぬ男

女より

見え透いたるお上手をならべ、心になき世辭を喋べり、行事徒々しきもの、

イヤに氣取り、妙に飾り、我は好男子ぞと免許して、大抵の女が振反つてでも見るやうに思ふらしき人、

ケチ〱して切はなれ惡く、決斷なく、コレトとして頼よるべき主宗のなきもの、

骨まで 軟きやうなる軟骨男子、凜々しき所の少しも見えぬもの。

あまりお心よしの人、

コセ〱して小さき事に氣がつき、大やうでなく、高等でなきもの、

お酒の上の惡しき人、

家内に泣で師つて見せ、竹を割つたる氣象なく、眞面目の所ろなきもの。

好かぬ女

男より

面白くなき顔色にこつてりと化粧し、妙に決つて見て、人が注意してくれると思ひ居る女、

利巧氣に口を出し、何事も知つた風に、自分の手柄風に、餘計におしやべりする女、

學問を鼻にかけ、英語を知つた風に話す女生徒、

凡人よりはエライと見せびらかす女、

あまりベタ〱して飴の如き女、

亭主の威光を笠に冠て朋輩に高ぶる女。

蟲聲草露

◎山川と民心

井梼道人

われ曩に、江都より烏城の間を遊歴するや。駛せ行く、汽車ノ窓より、遥くまた遠く山河自然の形容を眺望して、轉た長大嘆息に堪へざるものありき。あはれ此山彼峯、いづれか禿顱を露し、骨梁稜々たらざるものやある。彼谷此河、皆悉く底身破れて、水涸れ、少く満てば、乍ち溢れなんとす。山あり高きあり、されど樹乏しくして好からず、河あり廣きあり、水少くして深からず。山はもとこれ一大貯水池なり、河流これが爲に饒なるを致す。されど今の如きは、山其用をなさず、河、田園を養ふの力を欠く。廢れたること如斯く、國内到る處、然らざるなきを聞く。あゝ、昔は、豐葦原の瑞穗の國とて、國土豐に、成出るものの澤なりしものを、今や山川、それ既に老いて、且つ衰へたりや。

これを人生に觀る、紅顔既に色あせて、白髮、鏡面に呈し、額には、さゝれ小波の數を寄せ、昔は烱々たりし眼光今は曚朧たり。石をも砕きし齒牙、零落して、唇吻また凋衰するの時や、老境益々矍鑠たり、一斗の酒十斤の肉膏に依て恣なる伏波將軍も、馬上還するの衰態を免れず。夫れ魂魄相伴ひ、形心相離れず。人や、形骸に於て老すれば、心又た衰ふ。

これによりてまた知りぬ、爰に國土あり、山河の形容頽然として枯槁するの日、焉ぞ民心の凋落を伴ひ來らざらんやと。

我國今や人心いたく委靡して、老態また起たしめがたきかの嘆あるに於て、山川自然の狀勢を觀ずれば、彼此相約する處深く、天理の曾て過たざるを知らずんばあらず。

山嶽峥嶸の氣凝りて、英雄を生じ、江河澎湃の魂成りて、偉人を産むは其理あり。されどまた何ぞ英雄といはんや、偉人といはんや、凡て人情の風土と相關するとの大なる、深山大澤は、東奥の民となり、平凡奇趣なき山脈の蜒蜒たるは中國の民となるも又自ら理ありて存す。而して天然の尤も豐饒なる磐地は、即ち血氣澎湃たる蕃民の住する處なり、所謂處女地は、青年的人民の耕す處となる。之に反して、老地に老民あり、我邦即ち此類なるなからんや。暫く其山河を觀よ。

人の老は、形骸一死あるのみ。年歯の進む處、一日の若きを再復せしむる能はず。天地は然らず、頽容ありて、また舊に復せしめ難きに非ず。誰か山川を破壊するものぞ、これ人為なり。然らば、即ち、この枯衰を挽回せしむべきの責の歸する處はまた人工にあり。一年にして壊ちしものは百年の治を要す。高山に森林を殺ぎ、河水に深淵を湛へしむべし。山川の形容、一たび變じて、元氣自然界に横溢するあらば、これに棲息する国民、これが為に、鬱勃たる青年猛進の気を復せざらんや。

今の人心荒廃、其傾は陥つて深し、これを救治するの策あらん。されど其用必ずや、この山河形態の枯瘁を挽回せしむるなくんば、遂に其効は全きを得る能はじ。

◎鼠の達磨

床の間の隅に掛けたまふ達磨様こそゆかしきものなれ。寂々寥々、睡不睡、凡俗を怒喝する恐ろしき面貌、いといかめしくして、さて鼠の大不敬をも咎め玉はず。大小いろ〳〵の鼠、縱横累々焉として、攀り立ちたまふは、ことに面白し。いつの昔、誰か如斯くに、面壁九年の高風を寫して、而も不倒翁とは名けゝん。大悟徹底なんど申しても、衆生凡俗に分るものに非らず。轉げて轉げぬ、不撓不屈、これでも曉れといふやいはずや、さてもいみじき大哲併が、あはれ、起り上り小法師と呼ばれ玉ふて、而も寂然として清靜自正なる、あな律しや。時としては、三千世界を達觀し玉ふ眼睛を抉せられ玉ふて、今年の[illegible]、當り申さば、眼一つ差上げんと、凡下に祈られながら、自らは白眼一生を睥睨したまふも亦をかしからずや。

◎郷の家

郷關を出でゝ多年、家に歸らざる游子、たま〳〵父母を省して、此時いたく感得するものは、我家、父母之を營みて、己れ爰に育ちし我家の、よしや旅生の宿なりとても、なつかしきことと、うれしきとの限なき事なるべし。道樂の果に、勘當受けて、家出せし息子が、何思ひけん、故郷戀し、父母なつかしと思ひて、歸心矢の如くなるも、扨て我家の閾は、いと高き心地して、跨げにくきぞ、眼つぶりて、一思ひに跳び込

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ねば、父母は双手を擧げて、待ち得たる甲斐あるを悦して、喜びに満ちあふれ、おのが不孝の大罪も、たゞ歸るといふ事にて、俄然赦されたるが如くに成ぜん。暫く信仰の道より離れしものゝ、よく悔改めて、神に歸るときの心も、また如斯けんか。神の家の閾の高さを、面目なげにも踏み入らは、其後の樂しみやいかなるべき。神の家なる哉。天地をこれ神の家なりと觀じて、眞とに之を樂しむとを得んには、其うれしさや如何なるべき。山川四季のうつりかはりも、一樹の趣味あるを悟り、天地の變動に、一しほの感覺を起かるべし。花の開落、鳥の聲、虫の音、月の影、はた雨に雪に風に雷に、思は更にゆかしかるらん、これ我父なる神の家に起る事々なればなり。また假令肉に於ける父母の家にては、受け繼ぐべき産業あらねばとても、神の家より與へらるべき富と資との、終に數へ難きとを、まことに覺知することを得なば、窮巷陋屋にも坎坷落魄を歎ずることぞなけん。あゝ我等は、我家の樂しきを知るが如くに、又神の家に在るの樂しみを知るを得なば、如何に幸多き身にてあるべきぞ。信仰とは他なし、神てふ父の家に安居して、憂を忘れ、樂しみを得ることにあらんか。

この單純なる信仰、これぞ眞の救の道なるべきかと思ふ。

◎心の花

いかばかり、節くれだちたる木なりとても、花さく春は、いとゞゆかしきものにこそあれ。櫻の樹も、花なくば、たゞの木なり。人情の温風そよと吹き來りて、信といひ愛といひ、また戀といふ、いともうつくしの心の花開きなば、見る目だにあらば、誰かはゆかしからざるべき。かれが眞心のうつくしさは、此時にこそあらはるれ。人の無情く、冷かなる嘲るをやめよ、春風の身を吹き誘ふことの足らはぬなるぞかし。深山の朽木、心は花になさばなりなん。歌仙かけらく、

深山木のその梢とも見えざりし
　さくらは花にあらはれにけり

さるにても、生死五十年、つひに、温き春山風に、心の花の花ざかりを誘はるゝことなき、かなしき人こそ、あはれなれ。

飢食松花渇飲泉　偶從山後到山前
陽坡軟草厚如織　困與鹿麛相伴眠　紹起

時文

●小說界の落莫

なにがし

早稻田派の新進作家の說話をそろへて、打出したる新著月刊は、醉茗敲玉の文字よりも、あられもなき側面凹下りの挿畫に、人氣をつなぎ止めしが、作者が流石に躊躇の、なほ鈍ぶかりければにや、はたまた讀者社會の嗜好の下品にて、あたらなき文士の苦心名作の價を知らで、却て強壓、はた又讀賣閥部に、うつゝをぬかせばにや、遂にあはれの最後になりてより、賣行も既に冷かなり。梧桐一葉落ちて天下の秋を知るとかや、新著月刊廢に亡びたるは、これ小說界の落莫を佇ぐるものにあらずや。文藝俱樂部も、評判高く、新小說は、大改良を爲してより、價こそ上げたれ、紙數は、却りて減少し、一体に元氣消沈したるの感あらしむ。其他、春陽堂、鶴山堂より、新版小說は、いと稀に成り行きぬ。去年の小說今年は、今何處にか去りけん、有爲轉變の速かなることまた驚くべきかな。新聞紙の、續きもの小說も、一體に不景氣となり、万朝の探究、朝日の桃水など、少しは評判となるべけれども、社會は一般に講談物を歡迎して、讀賣、都、日共に大多數、新聞紙の、これを載せざるはなく、其甚しきは、毎日二種相掲ぐるもあり。驚くべき、東京大阪兩朝日との、一つも之を掲げざるは、異數なり。講談物の全盛に於けるは、時勢の低きが故と、文士方の勉強はあるべけれども、然しながら、我等も、俳句、講談の投其次ぎはさ、新聞の衰ふるを待ちつゝあるなり。

●小說家の不作

紅葉は更に雜文を弄するのみにして、露伴氏、鏡花の不評判以來、敢に作を示さず、新小說、反省雜誌(東朝詩話)中のものゝ詩調的何篇の如きは、露伴の面目を示すものに非ず。彼は鳴かず蜚ばざる事三年にして、大に鳴らなさんとするものか。紅葉の多情多恨、金色夜叉も評判頗に濃切れ、入毗たすきは、不評判にて中止(?)となり、新小說の「心中日」の翻譯も、種出なきからのやうなり。彼の近頃、外國種ばかり蒔きたがるは如何、自家の種切にてもあるまじきに。鷗外は、智慧袋に智慧を包みて、暫く小說を他處にし、露村が、朝日の片隅に、こそぐる的道化物の青淡しも、評判はなし。要するに、先進作家といふ連中は、いづれも喜休中の有樣にて、扨て又、新進作家といふものも、牛門の弟子より、早稻田派に至るまで、面白くも可笑しくもなき、小說は作るが、それも、いと淋しくなりたり。されば當今の小說家は、一般に大の不作にて、秕ばかりが多いやうなり。年柄の豐作とは反對にて。

●雜誌界の不振

民友社の三雜誌は廢刊となり、其他諸雜誌とともに、賣行惡しき由、雜誌界また秋の淋しさを知るに至れり。世界の日本が週刊となりたるは、民友社の落莫に反して、いと目覺しきとの評判はありしが、扨て、彼自身には、如何なる運命の約束に向つて、進みつゝありや。

●新小說　第三年　第十卷　春陽堂版

本卷に載する過松居松葉の「俠韓士」といふ滑稽物と、田山花袋の「夜燈にて」ふ戀愛小說とあり。又何れも、とりあげて云ふに足らず。其外例によりて「人文」「訶藻」「劇界」「時報」等にぎはし。

◎女界文壇雜俎（本誌〆切まで）

女子の迷信	女鑑第百六十四號
教育と生産	女子の友第二十九號
日本女子の外交的修養論(佐竹常民)	日本女子會社第六十五號
女性改良の心得	世界之日本第二卷第二號
主婦の心得([illegible]女史)	太陽第四卷第十八號
女教育(川崎正児)	同
女子教育(なにがし)	教育報知第五百九十號
良妻打擊(女學雜誌より轉載)	毎日新聞九月七日
本邦婦人將來の心得(澤柳政太郎)	日本弘道叢誌第七十七號
[illegible]	東京朝日新聞九月十七日
女人論(大任)	社會評論第二號
現今の婦女問題(平田平三)	新世紀第一卷第八號
婦人及幼年者の勞働に就て(大原祥一)	東京經濟雜誌第九百四十三號
婦女論(西村茂樹)	東京學士會院雜誌第廿の七

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

片々

◎断髪の記　に就きて遠州相良地方旅館にて盲人教育の一兵卒盲狂生氏より、来状を寄らず、曰く。

前略未だ御目には掛らず候へ共余りの御悲傷御見舞申さゞるを得ざる故一書拝呈仕候只今旅館にて最近女学雑誌断髪の記拝見仕候処雨にも風にも妹と弟の事は忘れ難き拙生なれば貴下が最愛の令弟永眠の記事に接しては何共く申上げ様も無之我を忘れて泣き申候此の如き次第は大に貴下が慰むに其所に於て欠点の義とは存候へ共不肖なる者にて申上べき道を存不申何卒場合の許す限り御両元への御通信時に取りては御父母様及御兄弟方への唯一の療法と存じ天意は不明了の事多々なれども自然に判然の時有之ソレ迄はたゞ々々私は神の御心と丈に解釈致候耶は愛なりと我等の宗教は教へ申候草々多謝九月一日

謹厚なる同情を寄せられ感謝に堪へず、私書を謹郵することを能はず、よりて爰に紙上の一隅を借て未知の友盲狂生君に謝す。（鶴村生）

◎欧米諸國の帝室費及大統領の収入　を聞くに露國は百八十萬磅にして、墺國は九十萬磅、獨國は七十萬磅、伊國は六十八萬磅、波斯國は四十九萬磅、英國は三十八萬五千磅、白耳義は十三萬二千磅、瑞典は十一萬九千磅、和蘭は六萬磅、希臘は五萬二千磅、佛國大統領は四萬九千磅、米國大統領は一萬磅、瑞士大統領は一箇月五十萬磅位なり。但し佛國大統領の収入中には、臨時の費用として一萬二千磅、旅行費用として同一萬二千磅、此二口を併算しあり。米國大統領の収入にも、之れを加ふれば、佛國大統領の収入と大差なきに至るべしと云ふ。

◎上海の藝者の身代　一万両乃至三万両なりと。

◎小學女生徒の體操　来十月中旬に開かるべき東京府聯合教育會にては、小學校女生徒に課すべき體操及遊戯の種類に就きても協議せる由。

◎死刑廢止の議　は今回の刑法改正案に採用せられたりと云ふ。

◎米國にて獨身婦人の一新職業紐育府にては美貌の婦人に、一種の商法設けあり。そは「花嫁の介添役」なり、容貌の勝れて麗しきは一席の夜會に二百磅以上の報酬を得るに難からずといふ。（京華日報）

◎弔問に就て　我國にて死亡者ありし際には、一刻も早く弔問に赴くを以て其させる慣習なるが欧米に於ては親戚知友に非ざるよりは報知ある迄は故らに訪問せざる風ありて、通知ありしに就て訪問するにも、午前は之を避け成るべく午後に於てする慣習の由。就中皇族顕官其他身分高き人の死去につきて、公使領事等の弔問は、主に此慣習に依るといふ。蓋し先方の混雑又は悲痛を増さしめざる趣意に出でしなるべし。（東京朝日新聞）

◎女學生の装着用　近頃頗る流行す。女子學院の翁飾となり。東京府高等女學校生徒中にも多く、府下小學女生徒にも多し。

◎化粧　に狂するの結果、巴黎の俳優卒先して、香水の皮下注射をなし中毒の危險あらんとも意とせずといふ。

◎密賣淫婦の増加　大阪にては紡績業の不振と米價騰貴との結果により、今宮商業倶樂部附近、生玉高津近傍、天王寺公園安居の天神應田の社寺に夥多しく密賣婦を増加し、毎夜天王寺警察のみにても四五名を引致するよし。中には哺乳兒を抱き、一兒の手を携へたるの婦もありとの事なり。（東京朝日新聞大阪通信）

◎登君が承知すまい　帝政黨分裂如何は、目下の問題なり、然るに某は曰く、余外分裂は無いだらう。第一登君が承知しまい。而時なんぞお止なさいとやられるなとは、穿ち得て妙なる哉。

◎萬朝報讀者の實例を掲げ初めてより、俄に讀者四千を増し、紐育運の盛況頗々来りて山をなすと。

時報

墺國皇后を傷む

墺太利匈牙利國皇帝フランツ、ヨセフ第一世陛下の皇后エリサベス陛下には、過般来、玉體加療の爲、瑞西に啓行ありしに、去る九月十日、ゼネヴァ市まで湖水を小蒸滊船にて渡られ、上陸あられんとする一刹那、伊太利の無政府黨員にしてルッケニ（Luccheni）といへる一兇漢あり、突然躍り出で、短刀を揮つて、陛下の心臓を刺し奉り、之が爲、途に崩御せられたりといふ。陛下はバヴリア國マキシミリアン大公の女にして千八百三十七年十二月廿四日降誕あり、千八百五十四年四月廿四日立后あらせられ、御歳正に六十一歳とぞ承はる。

ヨセフ第一世陛下は、欧洲諸國帝王中にて、英國女皇陛下

に次きて、在位最も永き者にて渡らせられ、既に来る十二月二日を以て、即位五十年祝典を挙行せらるべきを以て、閑院宮載仁親王殿下には、天皇皇后両陛下御名代として参列せらるべき御予定なりし程にて、而して故皇后陛下には、正に四十三年間、皇帝陛下と並び朝に立ちて、御補佐の績いとも多かりしに、図らずも、此度俄かに[illegible]を絶たせられたるを以て、彼祝典も御見合せとなりし由、皇帝陛下には、御齢今や既にましまして、乍ち御伉儷を喪はれ、御悲歎まことに[illegible]なるべきに。又万乗の貴き御身を以て、この非業の御最後を遂げ玉ひし皇后陛下の御身こそ、痛みても傷ましきの限りなれ。

貞女の鑑　越中国■■郡■■村大字■■村平民高原■右衛門妻吉尾トヨは、夫と共へ嫁に来て身自ら守らざるなく夙に家道に勤へられしが、今回同郡知事は之を表彰するを左の如し。資性温順[illegible]一家和睦せり[illegible]常に孝養を怠らず[illegible]遂に其夫を失するに至りトヨの悲嘆甚ならず益々孝養を勤み[illegible]

皇后陛下御歌　畏くも　皇后陛下の女徳を詠ぜさせ玉ひたる御歌、

　徒ひかる玉も何せん身をてらす
　ふみこそ人の宝なりけれ

とあるなれば、[illegible]より[illegible]女学校等の生徒へ[illegible]ありしとぞ。

石井亮一氏　石井亮一氏は、去る八月中、白痴教育研究の為、米国を経て[illegible]国へ渡航せられたり。

篤学の老翁　■■県安濃郡■■村の松田ロウと云ふ、本年八十四歳の老翁、去三月以来鳥語術を学び九月に至りて試験の上免許状を受領す。

日本女子大学校　はこれを東京に新設することに改めて、四谷学習院移転後、其跡を校舎に充つる筈にて、校長は辻新次氏に内定せりと東京朝日新聞は伝ふ。

海外航業[illegible]の冒険　長崎県の出[illegible]二十二人は、船頭一人水手四人を従ひ、八尺帆の一小帆船に搭じて、露領ニコライスクへ向け航行したりといふ。

■■県中学校長会議　は九月十五日より向ふ一週間の予定にて開会せられたり。

○孝婦人　仙台市国分町の千葉平八といふ人は今より二十年前三十銭の資本を以て、■■行商を始め、一心に勤勉したるの結果、相当の身代を作り、近頃千余円にて家屋を購求せりといふ。

○電話交換手　東京電話交換局にて男女交換手募集中九月廿日頃まで志願者を受理したるよし而して今度其給料等に著しく改良を加へ、乃ち従来女子交換手を始めて採用する時の給料は十五銭以下なりしを改めて、十八銭迄に採用することとし、且増給期限も大に短縮し、三十銭以下は一ヶ年に三十一銭以上四十銭迄は二ヶ年となりたり、又■務監■の者には年末に於て賞与を給するの外精勤者には臨時特に賞与をなすの途を開き、勤続手当の制を創設し、満三年以上勤務のものには其退職若しくは解免に際し、現給十カ日分を一ヶ年に当て勤続年数に相当する金額を一時に取纏め給与せしむる等、大に其待遇を厚くしたりといふ。

○布哇前女王の帰国　布哇前の前女王リ、ウオカラニは、隠れて海外漫遊中なりしが、近き程に、加奈太の晩香坡より、■■■■に帰来して帰途に就かんとの決定なりと云ふ。これは、此国の米布合併につき、米国政府の意向は、大統領ドールを布哇知事に擬するよしなるも、布哇土人等は連署して、前女王を以て知事たらしめむことを請願せるに依り、近く前女王の帰途に就かむとするなりと云ふ。

○和蘭女王　和蘭の今上女王ウイルヘルミナ陛下は、なほ妙齢なれども、国民挙りて、いたく之に帰服し、欧洲諸国王者中にて、賢君の聞え、既に高し。陛下には、故父王ウイリアム第三世陛下の遺言を、■がせられたるが上に母后陛下の柔和貞淑の性をも受けられたりと聞し。なほ学校に教育を受けさせられし頃より、決断行の気風あらせられたり。御年十代の頃とかよ、内閣総理[illegible]の前面に、女王陛下が小児なる[illegible]を見せるなば、喜び玉ひて、直に命じて、之を、妙齢婦人の■に改めさせられたることあり。なほ其以前に十二三才にて在せし頃、侍講の某氏婦人に就きて、心よからぬ事のおはせしかば、地理の課業時間に、和蘭の国を描き玉ふに、和蘭国が大きく描かれて、本国は其陰になりて、いと小さく見えたるがやうになして、憂はれし事ありしとぞ。■■摂政母后陛下には、また務めて、女王陛下の民心を得たまんやう、事々に注意せらる、女王陛下の幼時、母后と共に、ヘーグ宮殿の附近を、馬車にて散歩せられし際、市民の小女等数人集りて、遊戯に耽けれる状を覧て、女王陛下には、其仲間に入りて遊ばんとし玉ふの情切なりしかば、摂政母后陛下には、直ちに、女王を車より下し奉りて、暫く彼小女等と遊戯を共にせしめられ、親ら車上にて之を打眺められしとぞ。なほ此女王陛下の平素の逸事伝ふべきもの尠からざれども、以上の二三は以て、其資性の程を推し奉るに可なるべく、和蘭国民は、今や賢主を仰ぐの幸福を得たりといふべし。

（ロンドンタイムスより訳載）

○墺国皇后葬儀　は去十七日維也納府カピユチン寺院にて執行せられたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

山梨縣下水害救濟義金募集

虔啓、當山梨縣下今回の水害は實に縣下未曾有の慘事に御座候、依之吾人縣下の基督教徒も應分の力を盡し窮民刻下の急に應じ度存候得共力薄く資足らずして事念ふに任せざるを以て汎く全國同胞の同情を煩はし度切望仕候、何卒斯の微擧御贊成の上有志の義捐を御勸誘被成下度候、頓首

明治三十一年九月廿四日

山梨基督教徒臨時救濟會委員

平岩愃保	林紋次郎	堤 江助
寺田喜平治	新海榮太郎	松野菊太郎
結城無二三	飯島信明	中澤德兵衛
三枝安太郎	米山定昌	加々美明
渡邊當三郎	渡邊澤次郎	小田一太郎
秋山荒次郎	深町正夫	大居定四郎
水野芳之助		

一 義捐金募集期限は來る十月三十一日迄とす

一 御贈金は甲府市櫻町壹丁目甲府教會牧師館內山梨基督教徒臨時救濟會會計主任相澤房次郎宛御送附ありたし

一 御贈金に對し別に受取證を發せず雜誌「神之國」に掲げて領收に代ふ

一 義捐金は本會より直接窮民に頒つ

佐川靜濤　小此木信一郎　二氏合著

俳諧史傳

和製美本　紙數三百二頁　中本全一冊

定價廿七錢　郵送　四錢　許郵券代用

俳諧の道近頃大に興り、去年此書を公刊せし吾社の微志をして幸に酬いあらしむ、幸慶何ぞ及ばん。それ、俳諧は我文學史上に一大特殊の光明を煥發す、一句十七言・尺幅の裡、無限の烟波渺々として際なし、俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて諧謔を擅にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる談林の花を咲かしめ、更に詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、閑寂沈痛なる正風俳諧の面目を構成す。數百年の間相傳へ、相襲きて庶民の美妙なる想念を涵游せしめ、幽妙なる詩天地に逍遥す。其源流に溯り、其發達を敘し、其推移を討ね、其變遷を記し、其特想を論じ、繙讀一番、焖焉として斯文學を腦底に活現せしむる」を期したるは、我が「俳諧史傳」なり。之を分てば、「俳人個々の傳記となり。之を聯れば、整々一卷の史篇となす。「逸事あり、名句あり。一誦の下、悠々乎として、月明かに花香しき境に遊ぶが如くならしめむ。若し夫れ一筆輕々に下さず、一字苟もせず、而も文章平易簡明、敘記精確剴切なるや否やは、世自ら公論あらむ。世の文士、一本を座右に備へざる可からず。

早稻田文學評に曰く、此書近年の好著、比較的に言へば、空前の好俳諧史傳なるべし、史眼の頗る闊大なる、敘事評論の其主題と相叶ふて優美、又閑雅、又遒勁なる、讀むものをして卷を措く能はざらしむるの致あり。

出版發賣元

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿九年三月十九日受領第二二號

四七二

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY